

和手遺跡

— カインズホーム建設に伴う
緊急発掘調査報告書 Ⅱ —

1997

長野県塩尻市教育委員会

和手遺跡

—カインズホーム建設に伴う
緊急発掘調査報告書Ⅱ—

1997

長野県塩尻市教育委員会

目 次

◇ 弥生時代の石器をみて	神 村 透	1
◇ 和手遺跡出土の弥生土器について	直 井 雅 尚	17
◇ 平安時代遺物の検討	小 松 学	24
◇ 熨斗を使ったムラ・イエ	桐 原 健	33
◇ 長野県和手遺跡出土の火熨斗の科学的調査	平 尾 良 光	37
	榎 本 淳 子	
	早 川 泰 弘	

例 言

1. 本書はカインズホーム塩尻店建設に伴い、塩尻市教育委員会が㈱カインズから委託を受けて行った、和手遺跡（長野県塩尻市大字広丘高出）の発掘調査報告書Ⅱ（考察編）である。
2. 発掘調査は、平成7年12月12日から平成8年3月29日まで実施した。遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、平出博物館において平成8年5月から平成9年3月まで行った。
3. 平成7年度の和手遺跡発掘調査の詳細については、下記の報告書を御覧いただきたい。
『和手遺跡』－カインズホーム建設に伴う緊急発掘調査報告書Ⅰ－
塩尻市教育委員会 1997
4. 本書の編集は小松 学がおこなった。
5. 報告書作成に際して、出土品の検討をしていただいた、神村 透、桐原 健、直井雅尚氏、ならびに火熨斗の科学分析をしていただいた、平尾良光、榎本淳子、早川泰弘氏からは、それぞれ玉稿をいただきました。厚く御礼を申し上げる次第です。

弥生時代の石器をみて

神 村 透

和手遺跡の石器を見せてもらってまず思ったのは、種類に富み、出土量の多いことであった。自分なりにいくつかの点で思うことがあったのでそれについてふれたい。

1. 石器組成にみる中期との違い

石器の種類と量といえば中期の特徴の一つとなっている。県内においてもそれはいえる。松本平の中期の拠点遺跡として県町遺跡がある。和手遺跡は後期前半の橋原土器（上伊那北部・諏訪湖盆・松本平南部）の松本平南部の拠点遺跡である。この2遺跡の石器組成をみると明確な違いがある（第1表）。和手遺跡になくて県町遺跡にある石器は、磨製石廂丁、太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧である。いずれも磨製石器で弥生時代を代表する大陸系磨製石器である。収穫具である磨製石廂丁は後期まで残るが数は少ない。和手遺跡でも一片それと思われる破片が出土している。伐採斧である太形蛤刃石斧、ノミとしての木材加工具である扁平片刃石斧は全国的に後期になるとなくなる。鉄器が普及した結果といわれる。和手遺跡で鉄器の出土はないが、砥石があり、鉄器の存在を思わせる。

大陸系磨製石器は形態・使用法・製作技術が農耕文化の伝来と共に日本にもたらされた石器である。これに加えて縄文時代以来の伝統である打製石斧、打製石鎌、石錐、磨石、石錘などがある。打製石斧と打製石鎌以外は数は少なく、どの遺跡にもあるというものではない。

同じ中期の遺跡でも下伊那の遺跡出土の石器は違っている（第1表）。打製石器の農具が異常に発達している。石鎌、打製石廂丁、横刃形石器、有肩扇状形石器、有袂石器、有柄石器がそれである。これらの石器は中期に定型化し、後期にまで製作使用される。最近の調査で類例は全国的に知られるが、セットとしての出土量の多さで下伊那は特別である。その理由として段丘地形と畑作との関係があげられている。

この打石製農具が和手遺跡では下伊那以外の遺跡として最も多い出土量をみせているのが注目される。

2. 打石製農具について（第1～4図）

下伊那の打石製農具と和手遺跡の打石製農具を比較したのが第1～4図である。

弥生時代の打製石器は円礫となっている硬砂岩の川原石を原材として、敲打によって剥離した大小の縦長や横長の剥片を素材としている。断面がカーブする自然面と、平坦な剥離面が交わる鋭い弧状の縁辺を刃部とし、打点側の厚い方を頭部としている。剥片の両側や頭部を打調整して整形している。製作が簡単容易であり、原材が入手しやすいこともあって大量生産ができる。

石鎌 打製石斧の中で巾と長さの大形の石斧で、刃部に土ずれの使用痕が残る。その形からA短冊形、B撥形、Cしゃもじ形の3形態にわけられる。和手遺跡ではA短冊形が3点あるが、いずれも自然面を残さない。また、石鎌よりも小形の打石斧の方が多い。

打製石廂丁 横長の剥片を使用し、A長方形で両側にえぐりのあるもの。B長楕円形の横刃形の2形

態があり、普通、Aを打製石庖丁とよび、Bを横刃形石器（横刃形石庖丁）とよんでいる。和手遺跡ではえぐりのある打製石庖丁が1点、典型的な横刃形石庖丁はなく、えぐりのない長方形のものが1点ある。

有肩扇状形石器 大きめの剥片を使って、側縁を打調して柄部をつくる。刃部より柄部（頭部）が狭く肩があり、刃部が弧状をなしているので有肩扇状形石器とよぶ。剥片の形や使用により刃部が必ずしも弧状でなく直線的なものもある。柄部の加工状況によって形態が違っている。和手遺跡では4形態あるが、下伊那ではもっと多い。A両側縁を丁寧に打調して長方形の柄部をつくりだすもので、和手遺跡では柄部が短い点がある。B両側縁にえぐりを入れたもので、有挾石器と似ているが、頭部巾が刃部より小さい。和手遺跡では4点ある。C縦長の剥片を使って、両側にえぐりをいれているが、B程深くない。和手遺跡では大形と小形とあるが、下伊那に較べると打調は雑である。D台形で、両側にわずかにえぐりを思わせる打調がみられるもので、和手遺跡には1点ある。

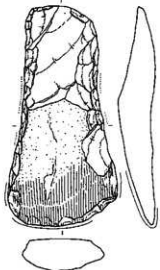
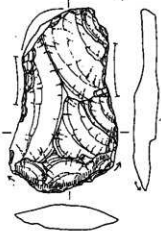
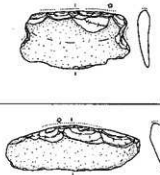
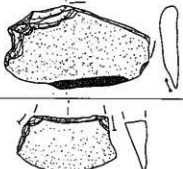
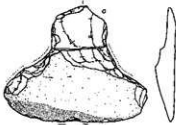
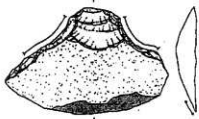
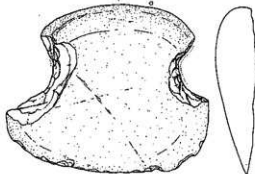
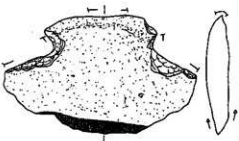
有挾石器 両側にえぐりを入れて頭部と刃部にわけ、頭部の方が刃部より巾が長い、同じ位になっている。A横長の剥片を使っているもので、これが普通である。B数は少ないが縦長の剥片を使っている。和手遺跡ではAが3点ある。

有柄石器 横長の剥片を使っており、両側縁にえぐりを入れているが、有挾石器と違って頭部が左右に突出している。桶加工の道具の一つである剪によく似た形態をしている。下伊那では数少ない石器であるが、和手遺跡では3点もあって注目される。

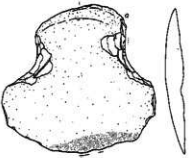
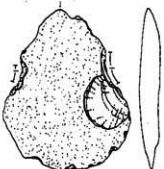
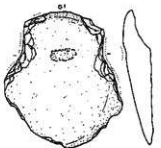
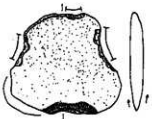
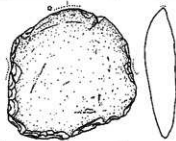
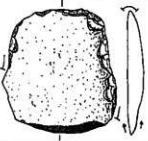
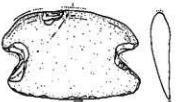
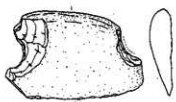
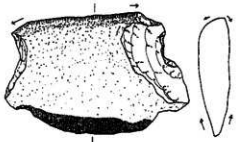
横刃形石器 普通、横刃形石器というと横刃形石庖丁をいうが、扁円形の大きな剥片を石器として使っているのも横刃形石器大形と区別していた。下伊那では中期後半に少量みられるだけであるが、和手遺跡では12点もあって多い。A剥片そのままを使っている、B頭部に打調があるもの、側縁に打調のあ

2地方の遺跡		下伊那			松本平		
		中 期	後 前	後 後	泉 町	和 手	田 川 端
農 具	石 鋸	○	○	○	○	○	○
	磨製石庖丁	○	○	○	○	?	○
	打製石庖丁	○	○	○			
	横刃形石器	○	○	○		○	
	有肩扇状形石器	○	○	○		○	
	有挾石器	○	○	○		○	
	有柄石器	○	○	○		○	
工 具	太形蛤刃石斧	○	○		○		
	柱状片刃石斧	○					
	扁平片刃石斧	○			○		
	石 錘	○			○		
	石 槌	○					
	敲打器	○			○	○	
	磨 石	○			○	○	
	砥 石	○	○	○	○	○	○
	台 石	○	○	○	○	○	
	打 石 斧	○			○	○	○
武 具・狩 猟具・漁 撈具	打製石鏃	○			○	○	
	磨製石鏃	○	○		○	○	
	石 劍						
	石 戈						
	石槍状石器						
	環状石斧						
紡 織 具	石 錘	○					
	紡 錘 車		○	○		○	
調 理 具	編 物 石			○			
	磨 石					○	
	石 臼	○					
	石 凹				○	○	
	大形横刃形石器	○	○				

第1表

種類	類	下伊那	和手
石 鍬	A		
	B		
有肩 扇状 石器	A		
	B		

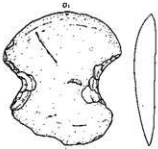
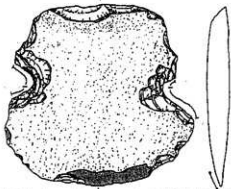


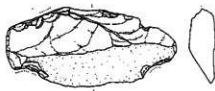
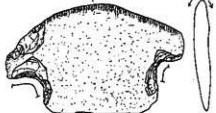
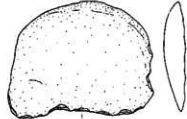
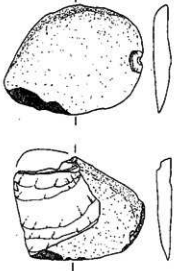
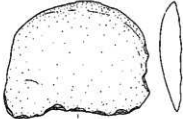
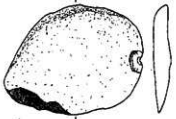
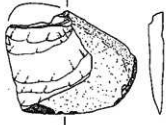
第1圖

種類	類	下伊那	和手
有肩扇状形石器	C		
			
	D		
		A	
			

第2図

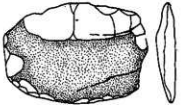
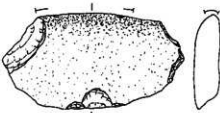
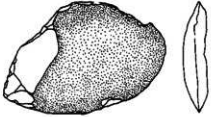
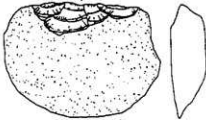
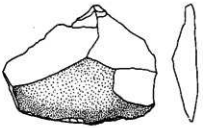
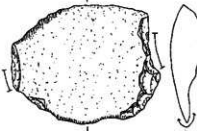
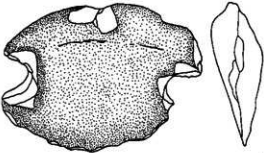
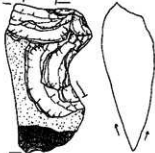
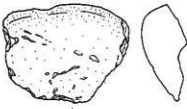
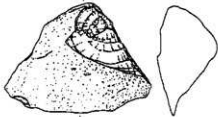
るものと区別できる。

その他 2点であるが部厚い石器がある。Aは有扶石器の破片で、頭部が部厚く重量がある。下伊那でも一点あって、自分がかつて割材斧と考えたことがあるが、和手遺跡の使用痕からみれば、有扶石器

種類	類	下伊那	和手
有袂石器	A		
			
有柄石器			
			
横刃形石器	A		
			

第3図

の一つかも知れない。Bは異常に頭部が厚い三角形の横刃形石器である。特別な裁断具と思われる。

種類	類	下伊那	和手
横 刃 形 石 器	B		
			
			
そ の 他	A		
	A		

第4図

3. 工具と磨製石鏃 (第5図)

石器の数からみると工具が多い。敲打器、砥石、台石がそれで、石器製作の道具である。砥石の中には鉄器のためのものもある。打製石器の中で農具は敲打器一つで製作できる。全てとはいえないが、工具の多くは磨製石鏃製作を目的としたもののように思われる。必要なものとしてないのは石材をきるすりきり具と石鏃に孔をあける石錐である。

敲打器（敲石） A片手で持てる硬い円盤で、角を使って原石を敲いて剥片を割取るもので、いわゆる敲石である（第5図1）。B面のある棒状の少し大きい川原石を使っている。面の一か所、稜の一か所に鼠歯状痕が残っている。棒状の片端を持って台石の上においた剥片を敲く両極調整の敲打器である（同図2）。C手で握って両端が少しでる位の棒状の川原石で、握って原石を台石の上において上部から打つ両極打法の敲打器で両端に打痕が残る（同図3）。砥石をかねたものもある（同図4）。

台石 偏平円盤を分割してひざの上にのせるのにより大きさにしている。中央に鼠歯状痕が残る、敲打器Bと共に両極調整に使ったものである（同図5）。

砥石 砂岩と泥岩とあって、磨製石鏃製作には砂岩を利用したものと思われる。泥岩のもの仕上げ用に使っていたと考えられるが、主目的は鉄器用である。砂岩の砥石にはA川原石をそのまま使っている大きなもの（同図6）、B小形で角柱状に、円柱状になったもの（同図4、7）、C小形で偏平なもの等がある。

磨製石鏃 未製品（同図8～14）と完製品（同図15～17）があるが、未製品が多い。石材としては粘板岩、珪質頁岩が多い。粘板岩は大きな剥片がとれるためか、すり切りで目的大きさにしているもの（同図8）もある。目的剥片は打調で形を整え（同図9）、砥石で両面を磨いて厚さを薄くし（同図10～12）、えぐりを入れたり（同図13）、側縁を磨いて成形する（同図14）。その後穿孔するが、その未製品は出土していない。完製品は凹有孔となる（同図15、16）。銅鏃を模倣した有柄磨製石鏃（同図17）も1点出土している。県内では類別は少なく、恒川遺跡群に1点（同図18）ある。

4. 下呂石製石器と剥片（第6、7図）

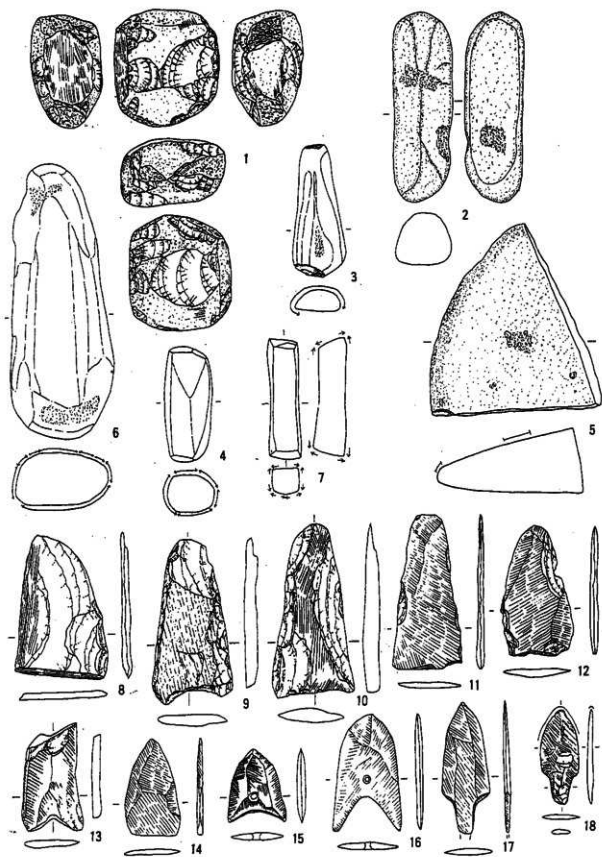
打製石鏃は48点と後期前半の遺跡としては多い方である。石材をみると県内の遺跡で普通の黒曜石が多く、チャートがあるが、注目されるのは下呂石で15点ある。下呂石は岐阜県益田郡下呂町湯ヶ峰に露頭がある黒雲母輝石安山岩（波瑠質）で、産地名をとって下呂石と呼ばれる。転石は飛騨川を流れ、木曾川と美濃加茂市で合流し、濃尾平野に入って木曾川町まで転石（石器原材として使える大きさで）としてあるという。

もう一つ注目されるのは下呂石の剥片で61点という多さである。59号住では6点、70号住では39点とまとまった出土があり、石器素材として収納されていたことを示している。

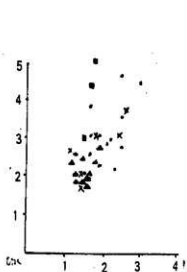
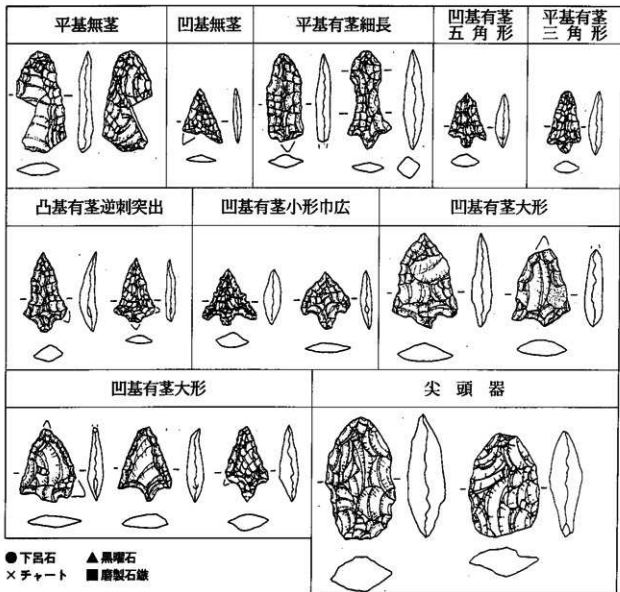
石鏃は無茎鏃は平基と凹基が各1点の計2点と少なく、他は全て有茎鏃である。有茎鏃は大きさと形から平基有茎細長、凹基有茎五角形、平基有茎三角形、凸基有茎逆刺突出、凹基有茎小形巾広、凹基有茎大形とに分類できる（第6図）。

石鏃ではないが、尖頭器も2点ある（第6図）。うち1点製作途中で折れたものである。

岐阜県文化財保護センターの佐野康雄さんは、下呂石の石核を分類して剥片技術をおっている。和手遺跡の剥片についてみてもらった。中濃地方の弥生時代遺跡は木曾川に転石としてある下呂石を石材として加工している。石核からみるとI～V類に分類できる（第7図）という。転石であるため石材はそれ程大きくなく、剥片は小さく、自然面は曲面をもっていたり、表皮の状態がざらざらしている。こうした中濃地方の石材と剥片を和手遺跡の剥片と比較すると、剥片が全体的に大きく、転石ではこれだけのものはとれない。自然面の状況も違い、石質も良い点、下呂町湯ヶ峰の露頭か、その近くで採取した石材を使っている。石核（コア）があったり、接合する破片もあるので、石材を遺跡に持ちこんで加工



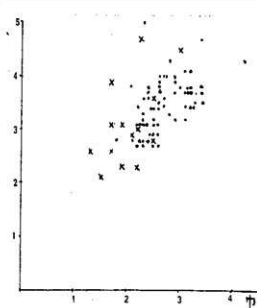
第5圖



1. 石鏃の長さ相関図



2. 石鏃の量



3. 下呂石とチャートの剥片大きさ

第6図

しているのではないか、という。石材が大きいこともあって、石核や剥片でみると、石核はIV類で90°打撃方法をかえている。また、大きい剥片からはそれを石核とするI類aもある、ともいう。

出土剥片の細かな観察はしていないが、佐野さんの指摘をもとにみると、石核（第8図1～4）、石核と思われるもの（5～7）がある。8は剥片の接合資料で90°打撃方向をかえているのがわかる。剥片には縦長剥片（9～11）、横長剥片（12、13）、三角形剥片（第9図1～3）、円形剥片（4～6）、折損剥片（7、8）、不定形剥片（9～12）などがある。これらはいずれも石核となりうる大きさである。剥片そのものも石器として使っており、スクレーパー（第10図1～3）、細部調整剥片（RF）（4～8）、使用痕ある剥片（UF）（9～11）もある。

5. 石器をみての独考^{ひとりのかんがえ}

(1) 打石製収穫具から

石器の製作技術と形態は下伊那と全く同じであり、使用痕からみて同様な使用法であり、下伊那以上に大事に使われている。下伊那と違う点は、製作技術がやや雑であることと、打製石廂丁（有扶及び横刃形）が少なく、有肩扇状形石器、有扶石器、有柄石器、横刃形石器など大形収穫具が多いことである。

御堂島正さんの使用痕分析と使用法の研究によれば、下伊那の打石製収穫具は大小や形態の違いはあっても、どれも禾本科植物を対象としており、石廂丁は手持ちで「摘む」道具であり、有肩扇状形石器等の大形収穫具は着柄して「刈る」道具である、という。

自分はこの大形収穫具は、稲の根刈り用、畑作雑穀の取り入れ用、屋根材としてのスキ（カヤ）の採取等に使用し、その目的に応じて形態差を生じたものと考えた。下伊那で特に多量に製作され、形態分化を生んだのは、材料が豊富であり、製作が容易であるという労働経済性からきたものであり、形態分は容易さに創造性が加わった結果と考えた。

天竜川上流域を中心に分布圏を持つ橋原式土器は下伊那の座光寺原式土器の影響を強くうけている。それなのに下伊那のように打製石器の多用はない。そうした地域性の中で和手遺跡における大形収穫具が各種にわたり数も多くあるのは特異である。和手遺跡の誰かが下伊那へ行って学んできたか、下伊那からの渡り人が住みついたのか、下伊那と直接結びつく人の存在を考えないで理解できない。

(2) 石鉄の存在から

和手遺跡で他の遺跡より多いものとして石鉄がある。県下では弥生中期後半に磨製石鉄が製作されるようになる。下伊那郡北原遺跡では集落全体で磨製石鉄を製作しており、有扶有孔タイプの中部高地型磨製石鉄をつくりだした。この製作技法とタイプは全県的に広まり、松本平では県町遺跡にそれをみる。後期になると殆ど作られなくなるのに、橋原式土器分布圏の中では、岡谷市橋原遺跡、海戸遺跡でも製作されており、和手遺跡も多い。磨製石鉄の他に打製石鉄も多い。黒曜石、チャート、下呂石を原材料として、その中で下呂石が一番多い。これも県下に例のない姿である。

石材別に石鉄をみると（第6図1、2）、黒曜石は大きさも小さめで、重さも1g以下に集中しており、最も加工しやすい石材といえる。チャートは大きさにバラツキがあり、重さでもそれがいえる。下呂石は黒曜石より一まわり大きく、重さも1～2gに集中している。磨製石鉄は打製石鉄にくらべて、縦長で、重さも2～3gとなって打製石鉄より一まわり大きく重い。

石鐮の用途としては狩猟具というところがあつたが、最近、武器としてのところが強くなり、弥生時代に戦いがあつたという学説が強くなってきている。集落間の緊張と対峙が環濠集落と武器の存在、戦死を示す人骨の発見などがその根拠となっている。

中期後半、近畿地方から濃尾平野へと勢力を広げた櫛描文土器が東日本へと進出して、中部高地では北原式土器、恒川式土器として定着する。この進出文化と、縄文文化の伝統をもつ栗林式土器との対峙が磨製石鐮の盛行となった。

後期前半の和手遺跡の石鐮が示す緊張は、櫛描文土器の北上で天竜川上流域に地域文化として発達した橋原式土器の人たちが松本平の一角に進出し、東北信に中心をもつ吉田式土器の分布圏南限である松本平の人たちとの対峙による姿と考えられる。

(3) 下呂石剥片から

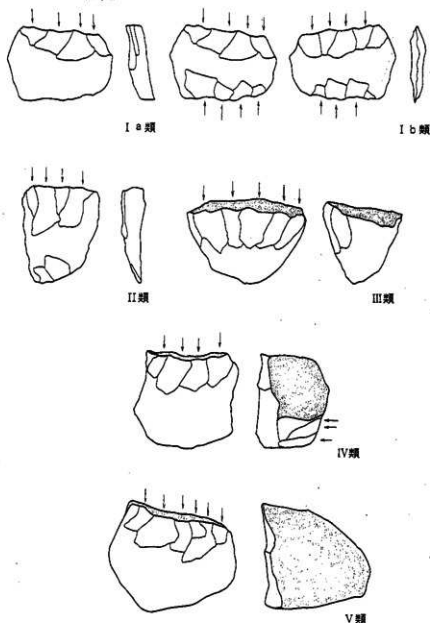
下呂石製の弥生時代石鐮は伊那や木曾での遺跡に、1～3個の出土はあつたが、和手遺跡のように数多い出土はない。しかも、和手遺跡は下呂石の剥片も多く、遺跡内で石鐮、石槍の製作を行っていたことを示す。剥片はチャートと下呂石があり、その大きさをみると(第6図3)チャートはバラツキがあるが、下呂石は巾が3cm前後、長さが3.5cm前後に集中し、当然であるが製品としての石鐮より大きい。

下呂石の存在は美濃との結びつきを示す。飛騨川が木曾川と合流する中濃地方では、飛騨川からの転石である下呂石を原材として石鐮を製作している遺跡が多い。そうした遺跡から石鐮素材として剥片が交易品として和手遺跡に搬入されたものと考えたが、佐野さんの指摘によると、川原の転石からの剥片ではなく、飛騨川の上流、下呂町湯ヶ峰山の露頭近くから採取した転石(角のある)を原材としておりそれを持ちこんで遺跡内で製作している、という。

和手遺跡からのルートをとたどると、奈良井川をさかのぼり鳥居峠を越えて木曾にでる。木曾川を下って坂下町、中津川市のある東濃地方にでて、付知川をあがって舞台場峠を越えれば下呂町である。この木曾谷ルートが最短であり、美濃東濃地方との結びつきを示している。現在、東濃地方の弥生中期から後期にかけての遺跡は見つかっていない。木曾地方では縄文後・晩期には石鐮がほとんど下呂石でつくられ、山口村川原田遺跡、南木曾町太田垣外遺跡からは大きな下呂石原石が出土していて、舞台場峠ルートが縄文時代から確立していたことを示す。和手遺跡の人たちは木曾谷の情報を知っており、積極的に石材獲得のために東濃地方へ足を運んだものと考えられる。

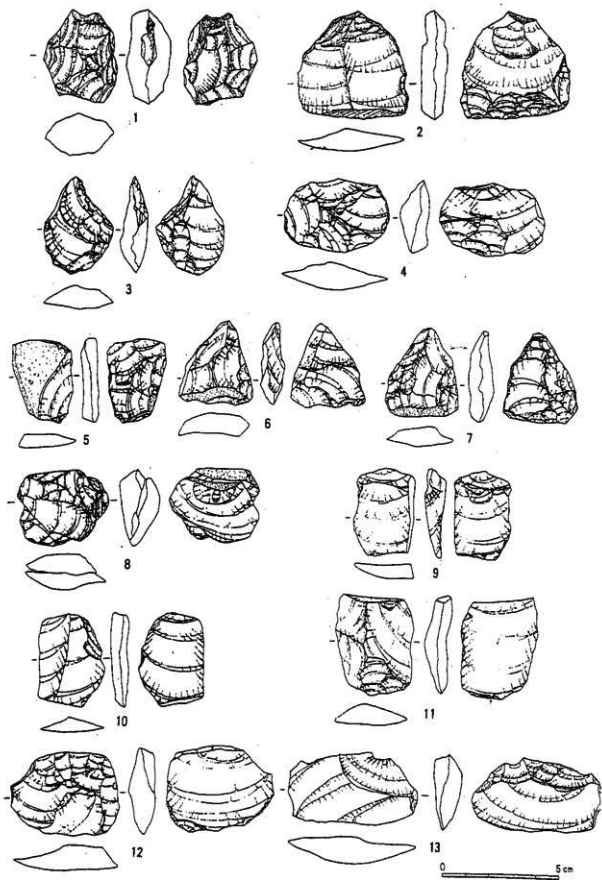
松本平南部における塩尻という地域が持つ特性を和手遺跡の石器は示しているといえる。東の塩尻峠で諏訪と結ばれ、さらに山梨を経て東海地方東部や南西関東地方と通じている。南の善知鳥峠で上伊那と結ばれ、下伊那を経て三河・遠江といった東海地方に通じている。西の奈良井川をさかのぼり鳥居峠で木曾路と結ばれ、美濃、尾張さらに畿内へと通じている。このように三本の交通路が塩尻で一つになっている交通の要地である。

和手遺跡の土器は上伊那北部から諏訪湖盆に中心をもつ橋原式土器であり、打石製収穫具は下伊那との結びつきを示し、善知鳥峠を越えて松本平へ進出した拠点集落といえる。縄文時代から続く木曾谷ルートは弥生文化の進出ルートにもなっており、その結びつきから下呂石を採取し、搬入してきたものである。このように和手遺跡は交通路をふまえた拠点集落といえる。

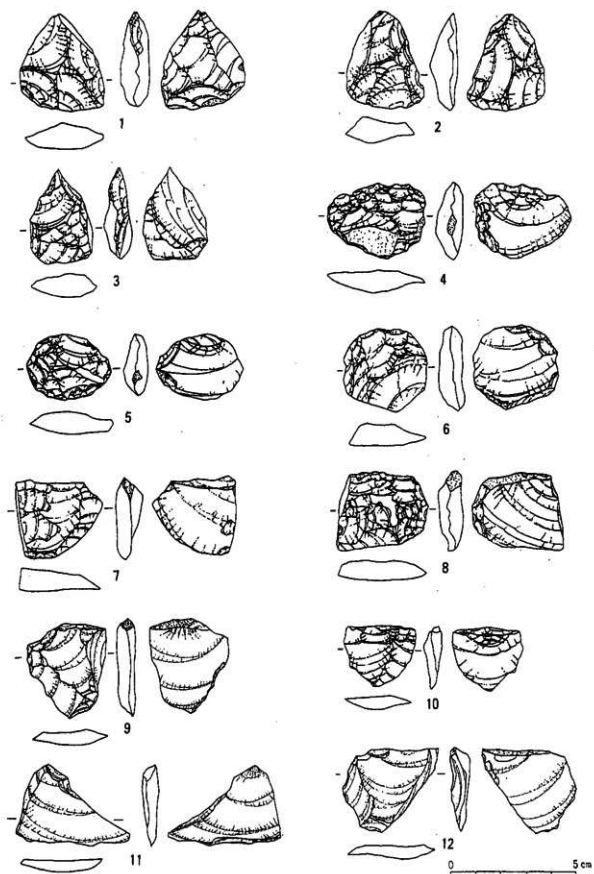


- I 類 やや厚みのある剥片を素材とする。縁辺から内側に向かって剥離剥離作業を行なう。
- I a 類 縁辺部を打面とし、腹面側を作業面とする。
- I b 類 背腹面を打面とし、背腹両面を作業面とする。
- II 類 上下両端にツブレ状の剥離痕が見られ、ピエス・エスキュー状の形態を呈する。打角はほぼ直角に近い。
- III 類 平坦な自然面を持つ分割礫を素材とする。この自然面を打面としてその周囲において剥離剥離作業を行なう。
- IV 類 分割礫を素材とする。打面及び作業面を多面的に設定し、残核の形態がサイコロ状となる。打面は自然面が選択されることが多い。
- V 類 円礫を素材とし、剥離面と自然面がなす稜を打点にして剥片剥離作業を行なう。転石を使用するが、あくまでも平坦な自然面を持っていることが必要条件である。

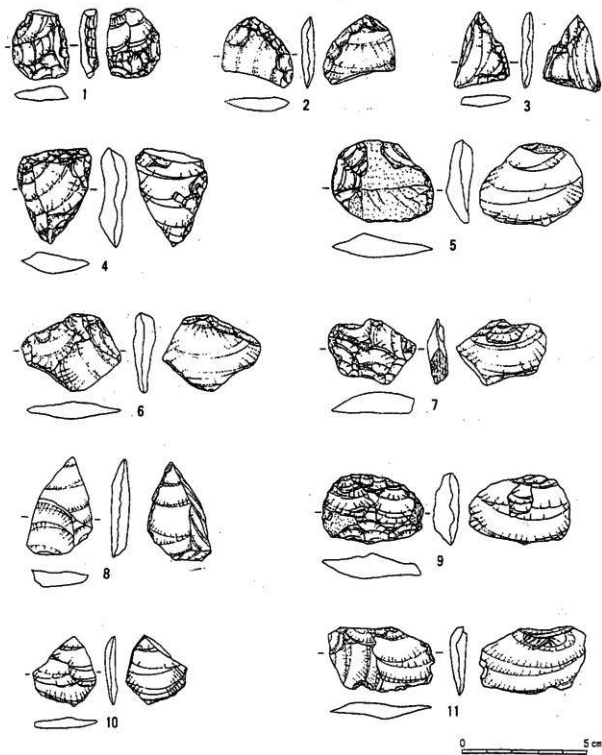
第 7 図



第 8 图



第9图



第10图

《参考文献》

- | | | | |
|----------|------|--------------------|---------------|
| 御堂島正 | 1989 | 有肩扇状石器の使用痕分析 | 古代文化41-3 |
| | 1989 | 「抉入打製石庖丁」の使用痕分析 | 古代文化41-6 |
| | 1989 | 「抉入打製石庖丁」の使用法 | 古代文化41-8 |
| | 1990 | 「横刃型石庖丁」の使用痕分析 | 古代文化42-1 |
| | 1991 | 磨製石庖丁の使用痕分析 | 古代文化43-11 |
| 沢田伊一郎 | 1994 | 弥生文化における石礫生産技術について | 考古学フォーラム4 |
| 佐野康雄 | 1995 | 下呂石を素材とする剥片剥離法について | 考古学フォーラム6 |
| 神村 透 | 1996 | 下伊那における弥生後期の石器 | ヒト・モノ・コトバの人類学 |
| 飯田市教育委員会 | 1986 | 『恒川遺跡群』 | |
| 松本市教育委員会 | 1990 | 『松本市県町遺跡』 | |
| 塩尻市教育委員会 | 1987 | 『田川端・宗張』 | |

和手遺跡出土の弥生土器について

直井雅尚

1. 特徴

(1) 器種・器形

器種(形式)には甕・壺・高坏が認められるが、実測図及び拓影で示した個体数は圧倒的に甕が多い。高坏は破片でもほんのわずかみられるだけである。基本的には甕・壺で器種構成される様式内容で、その他の機種はわずかに客体的に存在するにすぎないのであろう。

① 甕

甕は器形に注目すると、大別して2系統が認められる。

A: 口縁部が短く、頸部のくびれが弱く、口縁部ないしは胴部の比較的上方に最大径を持ち、胴部の張りがあまり強調されない形態(甕A)。類例は、52住3・4(第23図)、59住6・1・3(第24・25図)、70住6(第25図)、127住4(第29図)、178住1(第30図)。

B: 頸部から口縁部がやや長めで、胴部に緩やかな丸みを感じる形態(甕B)。類例は59住4・2(第24・25図)、70住4(第25図)、195号5(第30図)。

A、B両者の中間のような、口縁部は長めだが胴部の張りがかなり上方に偏るもの(125住3、132住7、165住3、202住7)も認められる。

180住3(第30図)のような口縁部が受け口状を呈すものはごく僅かみられるのみである。

② 壺

ほとんどの壺は口縁部を欠き、全形がわかるものが少ない。器形で分類すると48住5(第23図)、59住3(第24図)、70住5(第25図)、164住11(第29図)、202住1(第28図)、178住13(第37図:拓影)など胴部が丸みをもって大きく張る形態(壺B)が主体を占め、他に132住8(第29図)のように胴部下半が「く」の字に張るいわゆる無花果形の形態(壺A)、さらに59住2(第24図)のように頸部が太い形態(壺C)などの類型がみられる。

151住1(第31図)はかなり太い頸部に復元実測されているが、紋様構成からみても少し頸部の位置が高く細いものになると推定し、壺Bの範囲に含めたい。

③ 高坏

隣接地の前回調査分を含めても2個体の破片の出土があったに過ぎない。132住6(第29図)は胴上部、205住2(第28図)は坏部及び坏脚接合部であるが、いずれも中期末までには松本平南部ではほとんどみられなかった大形の高坏である。205住2の坏脚接合部は特殊な形状をしており、坏部の形態に若干疑問が残るが他地域の系統を考慮する必要もあろう。

(2) 紋様

壺・甕とも基本的に櫛描紋に限られる。櫛描紋の中でも波状紋、短線紋、簾状紋、横線紋、円弧紋、刺突紋及び刻み目などの多様性があり、これらが組み合わさって用いられている。櫛描紋の施紋原体は、単体が断面の径が1mm前後の円形に近い細い棒で、それを数本以上重ねたものを用いているとの実験考

古学からの指摘があり（文献1）、本遺跡でもこれは有効と考える。

① 波状紋

波状紋は最も多出し壺・甕を問わず用いられるが、本遺跡での最大の特徴は波状紋が複数段施紋される場合、上下の横帯が接したり重なったりすることがほとんどないことである。波状紋の1条ごとがきちんと横帯として意識されて施紋されていることを意味し、横方向への連続製とも深い関係があろう。これに反する例は132住8（第29図）の壺頸部あるいは拓影資料などに散見できる程度である。

波状紋の横方向への連続性についてしっかり観察できた個体は遺存状態の影響で少ないが、132住8（第29図）の壺頸部では一周の間に断絶はなく、179住2（第30図）の甕頸部や164住9（第29図）の理甕炉の甕頸部ではいずれも $\frac{1}{2}$ 周ほどの間にやはり断絶はみられない。これらの例から類推すると、波状紋は1周の中で1回しか途切れない、いわゆる畿内型が主流であったとみられる。

また、振幅を $\frac{1}{2}$ 回転くらいの上向きと下向きの円弧の連続で施紋する、いわゆるコンパス紋風の例が180住3（第30図）の甕、70住4（第25図）の甕などに見られる。ここでは施紋部位などから波状紋の変形的なものと捉えてみたが、他地域の影響を受けた、波状紋とは別種の紋様として認識すべき危惧も残る。

59住14の拓影資料（第29図）には口縁端部内面に波状紋が一条施紋されている。今回出土の土器群には、波状紋のほかにも刺突紋、短線紋などが甕の口縁端部内面に施紋される例が散見され、特徴の一つとなっているが、本例もその傾向の中にあるものといえよう。

② 短線紋

短線紋には単に横方向に連ねた横走短線紋（164住9：第29図の甕口縁端部内面）、同一の傾きをつけたものを連ねた斜行短線紋（52住3：第23図の甕、59住3・4：第24図の壺・甕、127住4：第29図の甕）、交互に傾きを離れた山形短線紋（52住5：第23図の壺）などがある。斜行短線紋はほとんど右上がりである。傾きの異なる斜行短線紋帯を2段以上かさねて横羽状の効果をあげているもの（59住2：第24図の壺）もある。

短線紋は主に甕や壺で波状紋やT字紋などの下部に、副次的に横帯の紋様帯を形成するように用いられているものが多く、短線紋のみで紋様が構成されている個体は少ない（164住11：第29図の壺）。まれに164住9（第29図）の壺、70住18・22（第31図：拓影資料）のように口縁端部内面に横走短線紋が施紋されている個体があり、非常に珍しい。

③ 簾状紋

簾状紋は壺の頸部を中心にみられる。52住3（第23図）、59住6（第24図）、180住3（第30図）などの各甕では1条だが、まれに59住1（第25図）の甕のように2条あるものもある。一方で簾条紋を全く持たない甕も多い。59住4（第24図）の甕は櫛描横線紋を同様の原体で細かく縦に切る構成となっているが、簾条紋を意識したものであろう。壺Bにもわずかに簾条紋がみられるが、59住3（第24図）や70住5（第25図）のように波状紋や短線紋・円弧紋などとともに複数の横の紋様帯群のひとつの構成要素になっている。

④ 横線紋

櫛描紋の施紋原体を横に走らせて単純な平行線条線を巡らせたもの。今回の土器群の中では出現頻度の低い紋様で、70住5（第25図）や99住4（第26図）の壺Bの横帯構成の紋様のひとつに使われているの

がみられるのみである。

⑤ 円弧紋

円弧紋は今回出土の土器の中では壺に限られている。櫛描紋の原体の一端を中心にしてきっちりとコンパスで同心円を描いたような $\frac{1}{4}$ 円弧紋で、70住5(第25図)、99住4(第26図)、59住7(第30図:拓影資料)、132住29(第35図:拓影資料)などの壺Bの横帯紋様のひとつの紋様帯として使われている。 $\frac{1}{4}$ 円弧紋の円弧の膨らむ方向は、左下(70住5)、右下(99住4)、上(59住7)など様ではない。

これらの他に、59住2(第24図)の壺Cに大きなカーブを描く特殊な円弧条の紋様がある。円弧紋というよりは「U」字状を呈している。T字紋B(文献10)の下部に横帯状に並んで配列されているが、T字紋の各縦沈線の直下に対応させて配されているようにもみえ、T字紋を意識した付随する紋様である可能性を検討する必要がある。

⑥ 刺突紋

今回資料の最も特徴的なものに刺突紋がある。櫛描紋の原体を用いて行ったとみられる列点刺突で、52住2(第23図)、59住15(第30図:拓影資料)、70住21(第31図:拓影資料)、77住21(第32図:拓影資料)など壺の口縁端部内面を中心に施紋される。数量的にはさほど多くはないが、同期の他の遺跡であまりみられない珍しい施紋手法である。

外器面にある刺突紋は、59住6(第30図:拓影資料)の壺とみられる破片に認められる程度で、さらに珍しい。

⑦ 刻み

壺の口縁端部、口唇部には細かい平行の刻み目があるものが散見される。この刻み目はへらないしは棒状の工具(半截・多截竹管凸面を含む)によるものではなく、櫛描紋の原体によって施紋されたと考えられる。詳しくみると、刻みが数本ずつの平行線のまとまりを示し、しかも細く浅い点からそのように推定できる。口唇部の刻み目をもつ土器はいずれも壺で50住17(第27図:拓影資料)、70住14(第31図:拓影資料)、127住4(第29図)、164住9(第29図)、178住1(第30図)、179住2(第30図)、195住5(第30図)など点数は多い。

⑧ T字紋

特殊な櫛描紋としては52住5(第23図)と59住2(第24図)の壺の頸部にT字紋がみられる。52住5は櫛描横線紋を3~4段接するように重ね、それを櫛描原体のおそらく単体による1本線で縦に6分割している。59住2にはやはり3段以上重ねられた櫛描横線紋を櫛描原体の単体2本で6~8区画に縦分割している。いずれも「T字文B」と分類されたものに含まれ、北信地方において主に後期初頭から前半に位置づけられている(文献10)。

⑨ その他の紋様

151住1(第31図)の壺にみられる大形の鋸歯紋はこれまでの和手遺跡出土資料の中では非常に珍しいものである。細い沈線で2段の横帯に区画した中に、それぞれ上向きの鋸歯紋を上下対応するように連ねている。鋸歯紋の外斜辺は櫛描原体によって描かれており、鋸歯の内部には同様の櫛描原体で施紋したと推定される刺突風の短線が方向を揃えてまばらに刻み込まれている。

(3) その他

成形や器面調整について今回は詳細に観察していないが、壺においては内面及び外面上半(紋様帯部

)は横方向の調整、外面下部(無紋部)は縦方向の調整が主になっている。施紋以前に前記の方でハケメ等の基本的な調整を行い、その後、紋様帯部分以外にはやはり同方向でミガキを施しているが、あまり丁寧ではなく、まったくミガキのみられないものもある。

2. 時期的な問題

(1) 編年観

今回出土の土器群は全体的にみて弥生時代後期初頭ないしは前半に位置づけられると考える。紋様施紋の面からその根拠を列挙すると、次のとおりである。

- ① 甕に条線紋などの中期的な紋様のごくわずかしみられないこと。
- ② 甕頸部の簾状紋はすべて等間隔止めであること。
- ③ 甕の口唇部に櫛描紋原体による刻みが多用されること。

これらは中期的な要素(③の刻み。ただし中期にはヘラや棒状の工具で刻む。)をわずかに残しながらそれが失われつつあることを意味し、一方で②のように後期後半に下らない要素も持ち合わせている。その点から前述のような年代観を導くことができる。このほか、壺・甕に用いられる短線紋・円弧紋も後期後半には失われる要素であり、ひとつの時期的な指標となろう。

器形のうえからは、壺Aは中期後半の粟林式土器様式のものに近いと考えられる。一方、壺Cは東北信の後期の箱清水式に通じるものと、天竜川流域の口縁端部が立ち上がるものの双方の可能性が考えられ、近隣の遺跡からは両者が見出されている。

松本平ではこの時期の資料報告が少ない。これまでの既出資料で後期初頭～前半と推定されているものは松本市出川南遺跡(文献11)、同市竹淵遺跡(文献6)などで、宮淵本村遺跡は未報告だがかなり近い時期のものが多数含まれていると考えられる。

(2) 時期的変遷の特徴

塩尻市上木戸遺跡出土の後期後半の弥生土器を考察した宇賀神誠司氏は、松本平南部の同期の在来系土器群について

A系：松本平以北の地域で主体的に分布する土器群

B系：諏訪盆地、伊那盆地北部(上伊那地方)で主体的に分布する土器群

と類別し、同遺跡ではA系がB系を凌駕すると指摘した(文献12)。これは後期後半の当地の状況を適切に捉えた一つの視点として一定の評価ができると考える。それに先行するのが本遺跡の後期初頭～前半という時期に当たるが、ここでは宇賀神氏のいうB系、すなわち天竜川上流域(注1)に主に分布する土器の器形、紋様の要素の方が明らかに強いのは後述のとおりである。さらに遡ってみると、中期後半～末の松本市県遺跡や岡谷市海戸遺跡(文献13・14)では、北信に中核があると考えられている粟林式土器様式(土器様相)の型式発展または型式変化として位置付けるべき土器が大半を占めている。

これを整理すると、松本平南部の土器は中期後半～末においては大局的に北信あるいは千曲川流域の土器様式に含まれる(注2)。ところが、後期を迎えるにあたってその背景は不明だが、急激に天竜川流域の土器の影響を強く受けることになる。それがまさに本遺跡や松本市竹淵遺跡の様相なのであろう。やがて後期後半になると再び北信地方の土器とのつながりが目立ってくるのであろう。

3. 地域的な問題

(1) 壺の波状紋

壺に用いられている波状紋が複数段にわたる場合、上下の段が接している例がほとんどないことは前述したが、したがって段数も最大3段程度で、施紋範囲も胴部中位以下に及ぶことはない。これは天竜川流域の壺の波状紋帯のありかたに基本的に共通し、岡谷市志平遺跡（文献3）や橋原遺跡（文献2）、辰野町樋口内城館址遺跡（文献4）でも同様の傾向（橋原遺跡では時期的に若干新しく、そのため波状紋に乱れが生じているものもあるが）を示している。木曾郡下でも同じ状況が指摘されていたが、近年の調査成果でかなり明らかになっていると考えられる（文献5）。

(2) 壺の施紋の2系統

壺においては、59住3（第24図）や70住5（第25図）、202住1（第28図）のように壺Bの胴部上半に波状紋・短線紋・簾状紋あるいは横線紋を上下接しないように複数重ねる紋様帯配置は、近隣の遺跡では松本市竹淵遺跡（文献6）などでみられる。岡谷市橋原遺跡55住、同70住（文献4）、辰野町樋口内城館址遺跡1住（文献2）などでも同様の複数段施紋の壺がみられるが、いずれも紋様は波状紋に限られている。天竜川上流域から松本平南部での分布を考慮すべきものであろう。系譜については、中期後半の栗林式土器の中から型式発展したものとは考えられないので、下伊那、東海西部などの影響を視野に入れなければならないであろう。

一方、52住5（第23図）、59住2（第24図）には壺B、壺Cという器形の事なりがありながら頸部にT字紋があり、この紋様自体は東北信地方の千曲川流域に分布の核が認められているものである。その点で東北信地方の要素を若干伴っているともいえるが、52住5のT字紋下部には山形短線紋が、また59住2のT字紋下部には特殊な円弧紋があり、純粋に千曲川流域的ではなく、かなり在地化された紋様構成となっている。他の遺跡をみると、辰野町樋口内城館址遺跡（文献2）でも、少数であるが壺の頸部にT字紋（T字紋B）の構成が認められる個体があり、やはりT字紋下部に短線紋の構成を持っている（33住273、39住294）。

以上のように、当遺跡出土の壺には明らかに少なくとも2系統の紋様構成の流れが認められる。主流は一見すると在地色が強いが、中期後半の土器型式の中から順当に発展したとは考えられない。横帯数段の紋様構成の壺。対する頸部T字紋の壺は、東北信に分布の中心があり、当遺跡の時期では客体的だが、松本平南部ではやがて主体になっていくものである。

これらに対して、151住1（第31図）の壺は明らかに異なっている。下伊那地域に分布の中心がある恒川式土器に位置付けられている壺の紋様に共通点が多く、編年的に彼地では中期後半から末に位置付けられているものである。しかし、この土器を出土した151住の他の土器は、大半の他の住居出土土器と同じ様相を呈しており、とりわけ中期後半から末に引き上げなければならない要素は特に認められない。あるいは詳細な検討を加えれば微妙な時期差を設けられるのかもしれないが、現状では大局的にみて共兼土器との年代観のズレが問題となろう。

(3) T字紋と「J」字紋

弥生時代後期後半に比定される塩尻市中島遺跡1号住居址出土の壺（文献7）、同市上木戸遺跡11住出土の壺（文献12）や、弥生時代後期末～古墳時代初頭に比定されている松本市三の宮遺跡第13号住址や第18号出土の壺（117・151：文献8）などに描かれる頸部のT字紋は、横線部を施紋する備描本体と

同じ歯数の複数本の条線が縦に切る、T字紋としては最終段階に位置付けられるT文字C(文献10)であるが、これらにもう一つ特徴的なことは、縦に切った櫛描条線の下端をそのままカーブさせて「J」の字状あるいは逆「J」の字状の、いわば「J字紋」といえるものになっている点である。天竜川上流域の岡谷市橋原遺跡(文献4)では35住で横線部分を欠く「J字」だけの同様な施紋(209)や、3住ではT字紋にはなっていないが頸部の横線紋の下部に「U」の字状の特殊な円弧がみられ(5)前者は後期のやや新しい段階に属すると考えられる。一方、北信の箱清水式的な色合いの強い大町市古城遺跡(文献9)でも31住の壺に典型的なT字紋の先端を「J字」に曲げたものがみられる(130・136)。このように、T字紋の先端を「J字」に曲げた、いわゆる「J字紋」は後期の後半には一定の地域的な広がりをもった紋様であったことも想定しなければなるまい。

この後期後半の「J字紋」につながるものとして、当遺跡出土の59住2(第24図)の壺の「U」字状の特殊な円弧紋が関連するのではないかと考える。同土器は櫛描横線を2本の縦線で切る古いタイプのT字紋(T字紋B)であるが、その縦線の下端に対応させて円弧紋が配され、円弧紋自体も通常とは異なる大きなカーブを描くものである。T字紋の縦線と円弧紋の配置に意図的な連関があるとすれば、これが次の時期段階の「J字紋」へと関連づけて考えるのも、あながち不自然ではなであろう。

(4) 口縁部内面の施紋

壺の口縁部内面にしばしばみられる、列点刺突及び波状紋・短線紋施紋についてだが、当遺跡と同じ田川水系下流の同期の竹淵遺跡では全く認められない手法である。口縁部内面施紋については、岡谷市橋原遺跡では11住出土の壺の口縁部内面に列点刺突を斜行短線紋風に施紋したものと、28住の大形の壺口縁部内面に波状紋と櫛描の懸垂紋が施紋されるものがある。前者は中期末から後期初頭をつなぐ資料として理解されている(文献4)が、後者は特殊な施紋で伴出土器からみて後期中頃以前には遡らないのではないと思われる、あまり参考にならないと考えたい。辰野町樋口内城館址遺跡では後期初頭～前半の33住や132住で壺の口縁部内面に波状紋が1条施紋される例がわずかにみられるのみである。このような他の遺跡との比較によれば本遺跡の口縁部内面施紋の比率はかなり高いといえよう。かなり時期的、地域的に限定されるものと考えられ、今回の土器群がどの地域の影響を受けているか解明するための重要な手掛かりとなる可能性がある。

(参考文献)

- | | | |
|--------------------|------|--|
| 1: 徳永哲秀 | 1995 | 『箱清水式土器の櫛描文の施文具および施文法について』
『長野県考古学会誌75号』長野県考古学会 |
| 2: 長野県教育委員会 | 1973 | 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
—上伊那郡辰野町その2—』 |
| 3: 長野県教育委員会 | 1980 | 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
—岡谷市内その4 昭和52・53年度—』 |
| 4: 岡谷市教育委員会 | 1981 | 『橋原遺跡』 |
| 5: 上松町教育委員会・木曾郡町村会 | 1994 | 『金毘羅遺跡』 |
| 6: 松本市教育委員会 | 1996 | 『竹淵遺跡II』 |
| 7: 塩尻市教育委員会 | 1980 | 『中島遺跡』 |

8 : 松本市教育委員会	1988	『松本市三の宮遺跡』
9 : 大町市教育委員会	1991	『大町市埋蔵文化財調査報告書 第19集 古城』
10 : 笹沢 浩	1970	「箱清水式土器発生に関する一試論」 『信濃』Ⅲ-22-11 信濃史学会
11 : 松本市教育委員会	1987	『松本市出川南遺跡』
12 : 長野県教育委員会	1988	『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 2 -塩尻市内その1-』
13 : 岡谷市教育委員会	1968	『海戸 第2次調査報告書』
14 : 長野県考古学会	1967	『海戸・安源寺』
15 : 茅野市教育委員会	1995	『家下遺跡』
16 : 塩尻市教育委員会	1996	『和手遺跡』

(注)

- 1 : 文献12では諏訪盆地を一括して把握しているように読み取れるが、近年の発掘調査では文献15に見られるように岡谷市橋原遺跡での土器様相をもって諏訪盆地を一概に括れない可能性が指摘されはじめている。
- 2 : 弥生中期後半～末の土器について、松本平南部のものを「百瀬式土器」として北信の栗林式土器との微細な差を明確にしようとする考えもあるが、私は大きく見れば百瀬式土器は栗林式土器の終末段階付近に位置付けられるものと理解している。

* 住居番号が2ヶ台の住居は文献16の押図番号、3ヶ台のものは本書の押図番号である。

平安時代遺物の検討

小松 学

平成7年度の発掘調査により和手遺跡からは、弥生時代から平安時代にかけての106軒の住居址が検出された。このうち平安時代に該当する住居址は84軒であり、これらの住居に伴って大量の遺物が出土した。遺物の中には、緑釉陶器、青磁、白磁、鉄製品などの貴重なものも含まれていた。

本稿では、これらの遺物が遺跡内においてどのような広がりを見せているのかみていきたい。

1. 墨書土器

(1) 墨書土器の推移

和手遺跡で墨書土器が見られるのは5期から9期の間であり、各時期において分布や字句に特徴がみられる。以下、時期別概要を述べてみたい。

[5期]第1図

和手遺跡で最初に墨書土器が出現する時期にあたり、156号住から「大」という文字が書かれた須恵器の蓋1点が出土している。

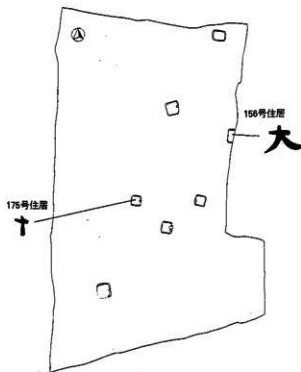
[6期]第1図

175号住から1点出土しているが、破片のため文字の判読は不能である。

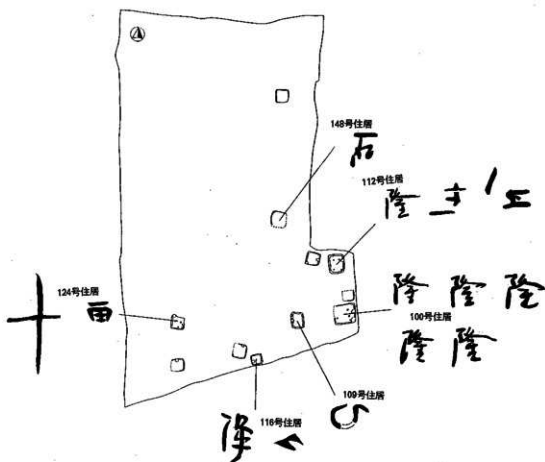
[7期]第2図

この時期になり墨書土器は増加傾向を示すようになり、11軒中6軒から出土している。分布的には、該期の住居址が調査区南側に偏っていることもあり、北側区域からの出土はなかった。

土器に書かれている字句をみると、「隆」という字句が圧倒的に多く、3軒から7点出土している。このことから、7期において「隆」という字句を保有する小グループが集落内にあったことが考えられる。この「隆」という字句は字体から同一人物の筆による可能性が強い。また、「隆」という文字を記した墨書土器は平成6年度の調査でも1点出土している。だが、この文字は字体から見て今回は異なる人の筆によるものと考えられる。しかし、このことから「隆」という文字が南へと広がりをもっていることが判明し、当時の小グループを考えるうえで貴重な資料となるであろう。



第1図



第2図

[8期] 第3図

和手遺跡において最も多くの墨書土器が見られる時期であり、住居址27軒のうち10軒から墨書土器が出土している。分布は調査区全域に広がっているが、南部に中心があった7期と異なり北部に中心が移動し、特に185号住居からは他住居をはるかに凌ぐ数の墨書土器が出土している。

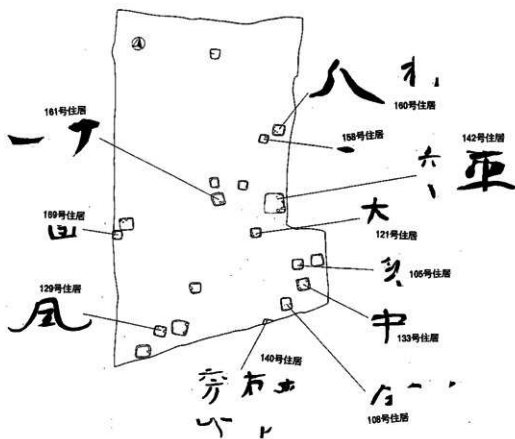
土器に記されている字句をみると、7期に多く見られた「隆」という字はなく、かわって「C-S」という文字というよりも絵や記号といった様相をみせるものが主体を占めるようになる。そして167号住居からは蓮の花をモチーフとしたような墨書土器が出土しており、仏教信仰に関連するものであると考えられる。このように、7期の「隆」を用いていた小グループに対し、8期には「C-S」といった記号的な墨書を共有していた小グループが存在していたと考えられる。

また、7期までは単字句の墨書しか見られなかったけれど、8期になると複数の字句の組合せも見られるようになる。

また、火熨斗が出土した106号住居からは朱墨を用いた転用碗が出土しており、住居の特異性の一端が伺える。

[9期] 第4図

住居址19軒中11軒から墨書土器が出土しているが、量的には8期を遙かに下回っている。記されている字句をみると、8期のような抽象的なものはなくなり、「八」「中」「大」といった字句がみられるようになる。しかし7・8期の様相とは異なり、小グループで共有していたような複数住居址から出土するような文字は見当たらない。



第4図

墨書の部位をみると、大部分が体部外面にみられ、あとは底部外面に記されているものが若干ある程度で、和手遺跡からは内面に墨書がみられる土器は確認されなかった。また、字句の向きには正位と逆位の2種類がみられるが、半数以上は正位である。

2. 緑釉陶器・白磁・青磁

和手遺跡からは、緑釉緑彩花文碗をはじめとする緑釉陶器や、輸入陶磁器である白磁や青磁といった貴重な遺物が出土している。時期別出土状況は次のとおりである。

[5期]

150号住から1点緑釉陶器が出土している。

[7期]

101号住から緑釉陶器1点と白磁2点が出土している。

[8期]

緑釉陶器が8軒から15点、白磁が2軒から2点、青磁が2軒から4点出土している。このうち106号住からは緑釉陶器3点と青磁3点が出土しており、他の住居とは様相が異なっている。

[9期]

緑釉陶器が7軒から12点出土しているが、白磁や青磁の出土は見られなかった。最も多くの緑釉陶器を出土したのは105号住で、4点が確認されている。また、169号住からは緑釉緑彩花文碗が出土して

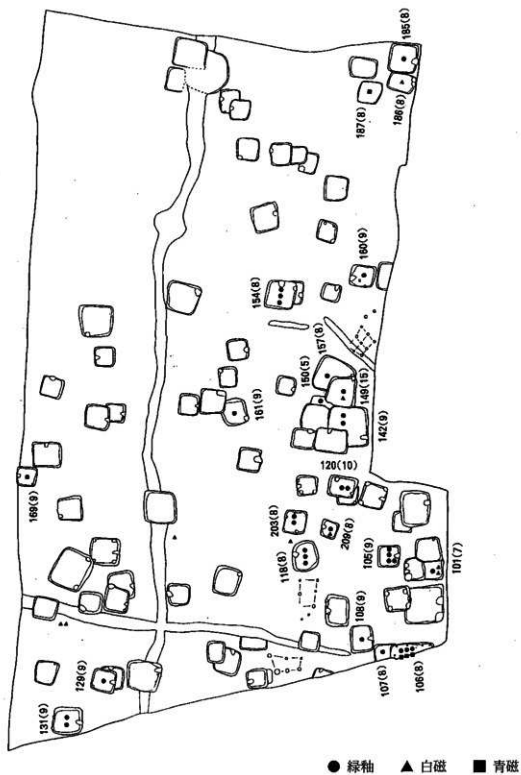
いる。

[10期]

120号住から緑釉陶器が2点出土しているのみである。

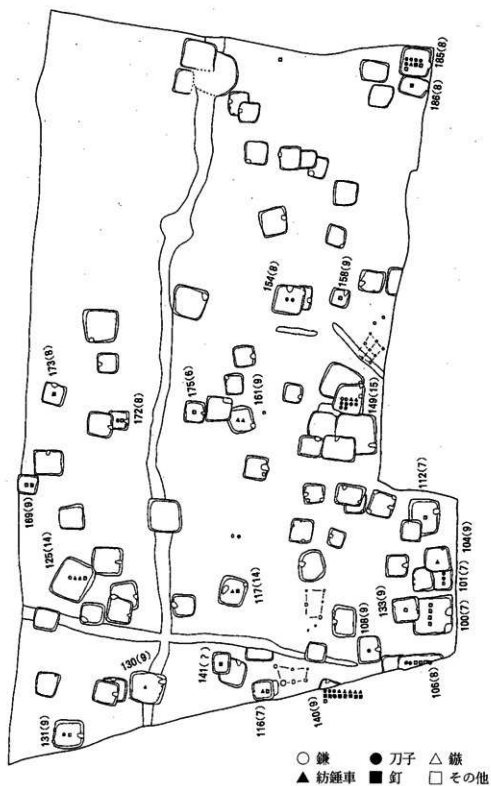
[11期]

149号住から緑釉陶器と白磁が各1点出土している。



第5図

このように、緑釉陶器は5期、7～10期、15期の住居址から発見されており、なかでも8・9期を中心に出土している。また、白磁は7・8・15期から出土しているが、住居址からの出土は4住居で5点と非常に少ない。遺構外からも4点出土しているが、時期は不明である。青磁は8期からしか出土しておらず、それも火熨斗が出土した106号住からまとめて発見されている。



第6図

3. 鉄製品

鉄製品が最初に見られるのは5期で最終は15期であり、22軒から遺物が出土している。このうち中心となる時期は8期と9期である。

なお各時期の状況は次のとおりである。

[5期]

150号住から紡錘車3点が出土している。

[6期]

175号住から1点出土しているが、破片のために器種は不明である。

[7期]

100・101・112・116号住の4軒から10点の鉄製品が出土している。内訳は101号住から鎌1点と刀子1点、116号住から鉄鎌1点と鉄錘1点であり、他の5点は破片につき判別不能であった。

[8期]

106・154・172・173・185・186号住の6軒から21点が出土している。住居別にみると106号住からは刀子2点と器種不明が4点出土している。また、鉄製品ではないが本址からは火熨斗が出土しており、注目される。154号住からは刀子2点が、172号住から刀子1点と不明1点が、173号住からは釘1点が出土している。また185号住からは刀子5点、紡錘車1点、釘1点、不明2点の計9点という、8期としては最も多い出土数となっている。この他に186号住で釘1点がみられる。

こうしてみると、8期から出土している鉄製品のうち刀子の占める割合が多くなっている。

[9期]

104・108・130・131・133・140・158・161・169号住の9軒から総計29点の鉄製品が出土しており、本期が最も多くの鉄製品が出土した時期である。なかでも140号住からは、刀子3点、鉄鎌2点、紡錘車3点、釘8点、その他1点の計17点の鉄製品が出土している。なお、この140号住はそのほとんどが調査区外にあるため、全体のほんの一部しか調査が行われていないため、住居全体としては相当量の鉄製品があったと考えられる。

9期全体としては、紡錘車6点や芋引金具1点というような機織り関連の製品が多くみられる。

[14期]

10期から13期までは鉄製品の出土は確認されず、14期になり2軒から出土が確認された。117号住から鉄鎌1点、釘1点が、125号住からは鎌1点、鉄鎌2点、その他1点の鉄製品が出土している。

[15期]

149号住から鉄製品が確認されている。鎌2点、刀子6点、紡錘車2点の計10点が出土しており、刀子の占める割合が多くなっている。

4. 集落の様相

墨書土器、緑釉陶器・白磁・青磁、鉄製品の分布状況をそれぞれみてきたが、ここではそれらを相対的にみていき、時期別の集落の様相の一端に触れてみたい。

[5期]

5期に比定される6軒の住居居のうち、150号住1軒のみで出土が確認された。しかし、種類のには

鉄製紡錘車が出土しているだけであり、墨書土器や緑釉陶器などは見られなかった。なお、この150号住は3.6×3.6mの方形を呈する住居で、5期の住居址の中で最も小さいものである。

[6期]

本期の住居址は175号住のみであり、この住居からは墨書土器と鉄器が出土している。しかし、緑釉陶器や白磁などは発見されなかった。

[7期]

11軒の住居址があり、100・101・109・112・116・124・148の7軒から遺物が出土している。なかでも101号住からは、墨書土器、緑釉陶器、白磁、鎌、刀子というように、多種にわたる遺物が出土している。

他にも墨書土器と鉄製品という組合せを有する遺物が出土した住居址は、100・112・116号住と3軒あるが、緑釉陶器や青磁、白磁は101号住から発見されただけであり、他の住居址からは全く出土しなかった。

このようなことから、7期において101号住が集落の中心的役割を果たしていたことが考えられる。また、既述のように101号住をはじめとして、100・112号住からは「隆」という墨書土器が出土しており、同一の文字を共有する小グループの存在も考えられる。

[8期]

今回の調査で最も多くの住居址が検出されたのが8期であり、27軒もの住居址が発見された。このうち19軒で墨書土器等の遺物が出土している。内訳は、墨書土器のみ出土した住居址は、103・146・167・176・196・206号住の6軒であり、鉄製品のみ出土したのは、172・173号住の2軒であった。また、緑釉陶器のみ出土した住居も107・118・119・157・203号住の5軒あり、209号住からは緑釉陶器に加えて白磁も出土し、187号住からは青磁が出土している。この他に3種類以上がまとめて出土している住居址が4軒みられた。

まず、106号住からは墨書土器、鉄製品、緑釉陶器、青磁が出土し、幾度となく紹介しているが、火熨斗も出土するなど、とても住居址の一部分を掘ったにすぎないとは思えない成果をあげ、154号住からは、墨書土器、鉄製品、緑釉陶器が出土している。また185号住からは、大量の墨書土器と鉄製品、緑釉陶器が、隣接する186号住からは墨書土器、鉄製品、白磁が出土している。

このように8期の住居址からは、墨書土器や緑釉陶器といった貴重な遺物が多く出土しているが、何種類もの遺物が集中して出土している住居址が4軒もあるということは、集落構造を考えるうえで重要である。

このような8期の集落は、出土遺物から見て大きく2つに別れると考えられる。一つは調査区南端に位置し、比熨斗の出土がみられた106号住を中心とするグループであり、一つは185号住を中心とした、「CS」というような抽象的であり記号的な墨書土器を共有する調査区北端に位置するグループである。

この2つのグループは、両者とも調査区の外れにあるため周囲の広がりや関係が掴みきれず、それぞれどのような広がりを持っているのかは不明である。

[9期]

19軒中、墨書土器や緑釉陶器などが全く出土しなかった住居址は5軒であった。出土が確認された14軒のうち、墨書土器のみ出土した住居址は121号住1軒で、鉄製品のみが発見された住居は104・130号

住の2軒であり、これまでの時期に比べ同一住居址から複数種類の遺物が出土する傾向が伺える。そして、墨書土器と鉄製品の組合せは133・140・158号住の3軒で見られ、墨書土器と緑釉陶器の組合せは105・129・142・160号住の4軒で見られ、131号住では鉄製品と緑釉陶器が出土している。また、墨書土器、鉄製品、緑釉陶器の組合せは、108・161・169号住の3軒で見られ、169号住からは緑釉緑彩花文碗が出土している。しかしこの169号住は3.3×3.3mの方形プランを呈する小型の住居であり、住居の規模が住居の価値に直結しないことをよく示している。

この9期の様相をみると、まず墨書土器には、7・8期にみられたような住居間で共有する字句はなく、同一字句を共有するような小グループの存在を見いだすのは困難である。また、墨書土器や緑釉陶器が集中するような住居もなく、各住居から平均的に出土している。しかし、鉄製品では140号住からは、住居址のほんの一部を調査したにもかかわらず、17点という多くの製品が出土しており、墨書土器も比較的多く出土していることから、この住居が他の住居址とは異なった性格を持っていたことが考えられる。

こうしてみると、緑釉緑彩花文碗が出土した169号住や、大量の鉄製品が出土している140号住などが本期の中心的役割を担っていたと思われる。

[10期]

本期は住居址数も5軒と少なく、緑釉陶器が120号住から出土しているだけである。集落の衰退に伴って緑釉陶器や鉄製品を保有するような家も減少したのであろう。

[14期]

集落の形成されなかった11～13期を経て、本期になり4軒の住居址がみられるようになった。このうち117・125号住の2軒から鎌、紡錘車、釘などの鉄製品が出土した。しかし、緑釉陶器などは1点も確認されなかった。

[15期]

100・145・149号住の3軒がみられ、149号住から鎌、紡錘車、刀子など10点の鉄製品が集中して出土している。しかし、他の住居址からは特筆すべき遺物の出土はみられなかった。

本期を以て、和手遺跡から人々の生活の痕跡は見られなくなる。

このように今回発掘調査が行われた地域に形成された集落のピークは、7期から9期にかけての時期であり、中でも8期に最盛期を迎えている。

和手遺跡では昭和62年から断続的に発掘調査が行われており、調査の結果から古墳時代以降、時代が進むに連れ、南から北へと集落が移動する傾向が伺える。その一連の流れのなかで、今回の調査区部分においては7～8期の集落が主体的に営まれたのであろう。

そうすると、今回の調査区から北側へ進むに従い、より新しい時期の集落が形成されることが考えられるが、現在のところ調査が行われていないため、想像の域を脱し得ない。

今後、これまでの調査結果を総括して資料分析を行うことにより、和手遺跡はもとより田川流域の古代の人々の生活が徐々に解明されていくことだろう。

熨斗を使ったムラ・イエ

桐原 健

場違いな遺物が出土したものである。古墳からの出土ならば何の問題もなかったし、長屋王など貴族の邸宅からの発見でも良かった。

それが平安の集落、それも信濃の堅穴住居から出土している。

新聞発表は「出土例は数少ない。高級品で高貴な身分の人が使ったものだろう。」で済んだものの、記者が今一步踏み込んで来たものなら完全にギブアップだった。

塩尻市高出の和手遺跡で昨年(1)月に発見された熨斗のことで、熨斗は60代以上の女性ならアイロンのことだと知っている。

衣装の皺のばしで、反物の地直しに使った。縫製時には使わなかったなど詳しいお答えもいただいている。機能・用途の判っている遺物だけに、なぜ堅穴住居から出たのかと聞かれると説明は難しい。

代表的な文献から熨斗記事を漁っていくと、18世紀初頭の『倭漢三才図会』の巻36、女工具の項に説明がある。中世には見られず、古代にとんで、11世紀末から12世紀初頭に成立した『今昔物語集』に見え、更に遡って930年編纂『倭名類聚抄』裁縫具のところのっている。『延喜式』では縫殿の条に「熨斗2口、熨炭36石」とあり、縫殿寮で縫製に従事している女官にとっては必要な道具だった。それが12世紀にまで下ると、反静かな海の面を「熨斗の尻の様に」と表現して(1)、熨斗の使用は殿上に限らず広がっている。平安時代後期に熨斗は特殊な器物ではなかった。

ここで、余談になるかもしれないが、熨斗の転用例を挙げておく。移動用の灯(行灯)とする説が中国にあり、転じて燵を運ぶ十能と考えた人もいる。灰火を入れて摩れば臍腹の冷痛に効くと説くのは『本草綱目』。冬に老人の臥所を暖めるために使った『大鏡』の記事がある。

本題に戻す。特別な器物ではないことがわかっているのになぜ、熨斗の堅穴住居出土に抵抗を感じるのか。それは出土点数の希少なことで熨斗を当てる衣装は絹だという先入観念があるからだと思う。絹を纏った窈窕たる美女が堅穴住居に居る筈はない。單襦・布袴・布袋にアイロンを掛ける必要などあるまいという意識によっている。

和手出土熨斗の納得いく説明を行うためには考古学的研究の定石に従い、まず遺構のあり方をみ、次に類例を尋ねて共通する何かを探り出す作業を行わなければならない。

和手遺跡は田川河岸段丘のうち、高位段丘面となる桔梗ヶ原台地の東縁に位置している。

高燥な地質で乏水地域だが、高出和手から野村の丘中学校までの段丘縁辺南北3キロにわたって15の遺跡が並んでいる(2)。この遺跡群を通観して注意される点は、12の遺跡から平安時代の遺構・遺物が検出されていることで、なかでも和手遺跡は87年の第1次調査では古墳末から奈良時代初頭が7軒、奈良の前葉・中葉が6軒、Ⅲ期の奈良末から平安時代初頭にかけては最も多くて15軒、出土遺物中に鉄製の紡錘車の多い点が注意されている。Ⅳ期にあたる平安中期になると3軒に減っている。

その後に行われた第2次、第3次調査で平安時代の住居址は180軒となった。特に多いのはⅢ期で

ある。

熨斗が出土した106号住居はⅢ期に属する9世紀末の竪穴住居で、調査区域の南端にかかっているために完掘はできなかった。1辺は7.5メートルで、おそらく方形プランであろうから床面積は56.3平方メートル。この時期としては大型住居の範疇に属する。罹災したおかげで板張の床のあったことが知られた。主柱は4本あったらしい。土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・青磁・白磁と豊富で、朱墨を磨った転用硯もある。鉄製品では刀子が出土している。和手集落は、田川高位段丘では核的位置を占め、106号住居は同集落中明らかに優位の家と目すことができる。

続いて、熨斗出土11例のあり方を窺ってみる。北佐久郡御代田町の川原田遺跡報告書(3)で集成した時は9例だったが、翌年の埼玉県花ノ木遺跡報告(4)では11例に増えている。従って和手遺跡の熨斗は全国12番目の出土ということになる。内容は古墳出土4、平安の一般遺跡出土6例。平安時代だが軽筒外容器の蓋に転用されたもの1例なので、古墳出土の4例と経塚の1例は除外できる。

平安時代7遺跡(第1表)に共通する点は東日本だということ。時期のところで中堀は雑々の資料整理中に見つかったものだから平安という大枠の中でしかいえない。落川は四面庇付総柱建物の一柱穴の上半部よりの出土で時期不明、ただし竪穴住居の年代は7世紀後半から11世紀まで、ここでは11世紀に置いておいた。残った5遺跡はほぼ同時期としてよいだろう。この時期、松本平にあっては集落域が最大限にまで拡大して水田の営まれないサトヤマまで開発されてしまっている。

生業からすれば米作り以外のムラが発展した時代と言える。

住居の規模・遺構では和手と花ノ木は核的住居、反対に川原田や多功南原は規模が小さい上に主柱なしという貧弱さである。遺物の出土量も少ない。そう言えばこの時期はムラの分解というか、住居小群に疎密の差が生じている。

和手・川原田・神明久保では転用硯が出土していて、ムラを管理する戸があった。花ノ木ではクルリ鍵が出土している。物品管理上重要な鍵を所有していることで、居住者はムラの有力者である可能性が高い(9)。

番号	遺跡名	時期	竪穴住居の規模構造	特殊遺物	遺跡出土の特殊遺物	その他
1	長野・和手	9C末	56.3㎡ (4本主柱)	青磁・白磁・ 転用硯・刀子	紡錘車・刀子 鎌	
2	長野・川原田	10C初頭	10.4㎡ (主柱なし)		転用硯・墨書 土器(寺名あり)	
3	神奈川・ 神明久保	9C	22.8㎡ (主柱なし)	転用硯・釘・ 鉄・砥石	釘・鎌・紡錘 車・鋳・楔	註5
4	東京・落川	(11C)			鍍瓦・字瓦	註6
5	埼玉・花ノ木	9C後半	33.6㎡ (4本主柱)	鉄・鎌・紡錘 車・鍵		
6	埼玉・中堀					付近に瓦葺建 物あり 註7
7	栃木・ 多功南原	9C	17.8㎡ (主柱なし)			註8

第1表

熨斗が出土した東国6遺跡の性格については渡来人居住説と付近に存在したであろう寺院と関連づけようとする説の二つがある。前説は熨斗はもともと中国・朝鮮の物品であり、本邦における熨斗出土古墳に朝鮮色の濃いこと⑩、平安期に限った場合、花ノ木遺跡の存する新庄郡が天平宝字2年8月に建郡された新羅郡に発していること、落川熨斗が分析の結果、朝鮮の純銅であること⑪が判ったなどに依っている。あまり説得力があるとは思われないが、これを和手遺跡に適用させるとなると、延暦16年に和風賜姓された後部牛養、宗守豊人が挙がってくる。彼等に与えられた田河造の名から田川流域に居住していたことが窺われる。高出和手はその田川の左岸段丘上に位置している。

後説の寺院に関わる考えだが、これは落川遺跡で近接している土坑内より釧瓦と宇瓦の出土していること⑫、中掘遺跡の第2次調査で瓦葺き建物址が検出されたこと⑬、川原田遺跡で大内寺・大平寺と記された墨書土器が出土していること⑭などに依っている。なお、この説には熨斗を当てる衣装は絹で、女性以外に考えられる者は僧侶だという先入観が重なっている。寺院との係わりだが、田川低平地の吉田川西遺跡からは、「西寺」「石□寺」「文□寺」、田川右岸の田川端からは「寺」「小□□寺」、田川段丘上でも北端の丘中学校遺跡からは、「□□寺」「□色寺」と記された墨書土器が出土している⑮。しかし、和手遺跡では寺名の記された土器をはじめ、仏教色ある遺物は全然出土していない。

結局、先に掲げた、熨斗出土遺跡が東国に偏り、同時期・同一地域内での核的集落であり、出土した住居はムラ中でも核的存在で、出土遺物に豊富な鉄製品のある点。その中でも紡錘車が多く、畑地における苧麻生産が考えられる点などが考究の鍵になりそうだ。

昨年11月に長野県立歴史館の96年秋季企画展『木簡が語る古代の信濃』を見学した。展示室の出口近くに複製の正倉院白布があって、墨書と信濃国印が明瞭である。調膚布は郡衙において国司・郡司立合いのものに検査を受け、合格の証として郡司が署名し国印が捺された。その際の布だが、きびしい検査にたえるためには皺々の布よりもアイロンのかかった布の方が高い点数をとれる。第一、皺々な布では署名するにも捺印するにも不都合である。展示に係った福島正樹に意見を求めたところ、「何を今更」といなされた。裏付ける資料はないが、文献研究者によってはまさに当然の常識ごとであるらしい。

調膚布の幅は2尺4寸で農民の織機では織れ得ず⑯、国衙、郡衙及び富農層のみが所有している幅広の機に依らざるを得ない。交易雑物である商布も幅広で、これも国・郡衙の付属工房で織られたものと推察されている。このことに関係してくるのが屋代木簡10号⑰の「金刺部富止布手」「洒人固布手」「金刺舍人真清布手」で、八世紀初頭、埴科郡衙の麻布を織る作業場に男子の織手を招集した記録と考えられている。平川南は、評家（郡家）に織布工房の存在している点を注目し、「在地社会における生産機構については国衙工房の役割のみを強調するのではなく、伝統的勢力としての郡司層の経済的優位性を考慮すべきで、郡司層は在地の生産機構を十分に掌握していたにちがいない。中でも生産用具の専有は極めて重要な要素であったと考えている」と述べている⑱。

講演では、「今迄、布は納税のための生産物と理解されてきたが、布は貨幣として重用され殊に信濃布の名は高い。布は郡衙の工房で大量に生産され、その一部が納税に供されたと考えたら如可」。発想の転換で、たしかに信濃における布生産は10・11世紀に顕著で、信濃の荘園から本所・領家へ京進される年貢の大半は信濃布が占めている⑲。信濃布が貨幣である以上、体裁は整えなければならず、最後の段階で行われるこの作業はこの集落の有力戸においてなされたと見るべきだろう。和手遺跡の106号

住居はまさにぴったりである。

そうなると、和手の熨斗を含めて12例、平安時代に限っての7例はあまりにも少なすぎる。最低、郷に1点とすると松本平だけでも10点は必要だ。それにも拘らず、発見例が少ない事由は該品が純銅で造られていること以外の何ものでもない。漬しての再加工が可能だからである。又、柄の取れた熨斗は香炉に間違われ易い。出土していても正しく報告されていないものもありはしないか。調査を担当した小松学の感慨がある。

註1：『今昔物語集』巻26の12話 校註者は「海面の平らなことを熨斗の裏面に譬えた形容に注意」と言っている。

- 2：塩尻市誌編纂委員会 「塩尻の原始」『塩尻市誌2巻』 1995
- 3：御代田町教育委員会 『川原田遺跡—平安・中世編』 1993
- 4：埼玉県埋蔵文化財調査事業団 『和光市花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台』 1994
- 5：平塚市教育委員会 『神明久保遺跡第1地区』 1991
- 6：日野市落川遺跡調査会 『日野市落川遺跡調査概報VI』 1992
- 7：栗原文蔵 「火熨斗の資料」『埼玉考古』29 1992
- 8：上三川町教育委員会 『多功南原遺跡—推定東山道「田部」駅家址』 1986
- 9：滝沢芳之 「熨斗について」註4所収 1991
- 10：福田健司 「古代の東京VI」『東京の文化財』50 1991
- 11：角山幸洋 「古代紡織具の構造と調膚織布」『愛泉女子短大紀要』2 1967
- 12：長野県埋蔵文化財センター 『長野県屋代遺跡群出土木簡』 1996
- 13：平川 南 「屋代木簡と古代の地方社会」『木簡が語る古代の信濃』所収 1996
- 14：桐原 健 「古代山村に見られる生業の一端」『信濃』37-10 1985

長野県和手遺跡出土の火熨斗の科学的調査

東京国立文化財研究所 保存科学部 平尾良光
榎本淳子
早川泰弘

1. はじめに

長野県塩尻市の和手遺跡(わでいせき)から出土した火熨斗(ひのし)に関して、塩尻市立平出遺跡考古博物館の小口達志氏から自然科学的な調査の依頼があった。本調査は当研究室における「古代青銅器の産地推定」という研究の一環として、十分に研究協力する価値があった。そこで、鉛同位体比法を用いて、資料に含まれる鉛の産地推定を行ない、また蛍光X線分析法を用いて遺物の化学組成を測定して材料の性質に関して考察した。

2. 資料

資料は長野県塩尻市和手遺跡から出土した火熨斗である(写真1と2)。和手遺跡の平成7年度調査領域で106号住居跡とされる焼失家屋の床上に張りついた状態で出土したという。資料の年代は共存した土師器、灰釉陶器などから9世紀末から10世紀初頭と判断される。試料の出土位置、出土状況、共存土器類に関しては別項を参照されたい。

火熨斗の利用形態が描かれている図柄を写真3に示す。これは、中国12世紀初頭の図柄で、宮中の一場面のように推測される。中央の女性が布の両端を2人に持たせて、火熨斗に炭火を入れ、皺を伸ばしている様子を描いているようである。火熨斗の用途は日本でも似たような目的であったと推定されるが、時代とともにどのような利用法であったのかはこれからの考古学的な理解に委ねたい。日本で平安時代以降に一般庶民に普通に利用された生活用品なのか、寺院などでの特別な用途に用いられたのか、あるいは地主、豪族ならば利用できる状態であったのかなどの情報は材料の理解を進める上で、重要な要素である。日本での発掘事例はそれほど多くはなく、平安時代を主として、全国で10点程度という。年代もかなり似通っているため、相互の関連性など今後の考古学的な意義付けに期待する部分も多い。

3. 測定

3-1 鉛同位体比法

1) 鉛同位体比法による青銅原料の産地推定

産地推定のために鉛同位体比法を利用した²¹、²²。一般的に、鉛の同位体比は鉛鉱山の岩体が異なればそれぞれの鉱山毎に特有の(固有の)値となることが知られており、産地によって特徴ある同位体比を示すことが今までの研究でわかっている。そこで、鉛の産地の違いが鉛同位体比に現れるならば、文化財資料に含まれる鉛の同位体比の違いは材料の産地を示すと推定される。古代の青銅には鉛が微量成分として0.01%程度、あるいは主成分の一つとして5~20%含まれている。鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定器(質量分析計)の感度が非常に良いため、1マイクログラムの鉛があれば十分である。また、青銅の金属部分でも鍍金部分でも、同位体比は変わらないことが示されているので、資料からは鍍

を微量採取するだけで十分である。これはほとんど非破壊といって差し支えない。そこで、この方法を本資料の原料産地の推定に利用することを試みた。資料から鍮の一部を採取し、鉛を化学的に分離し、表面電離型質量分析計で同位体比を測定した^{*)}。

2) 鉛同位体比の測定

資料から微量(5mg程度)の鍮を採取して、鉛同位体比測定用の試料とした。鍮試料を石英製のビーカーに入れ、硝酸を加えて溶解した。この溶液を白金電極を用いて2Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。0.2μgの鉛をリン酸-シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、サーモクレスト社製の全自動表面電離型質量分析計MAT262に装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1,220℃に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した鉛標準物質NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした。

試料採取位置を写真4で示した。

3-2 蛍光X線分析法

蛍光X線分析法による化学組成の測定はフィリップス社製エネルギー分散型蛍光X線分析装置DX-95で行なった。X線源にはロジウム管球を使用し、50kV、10μAの条件で空気中で300秒間一次X線を照射した。X線のビーム径は約φ20mmである。試料から発生する二次(蛍光)X線は元素ごとにそのエネルギーが異なるため、シリコン-リチウム半導体検出器でエネルギー毎のX線強度を測定することによって含有成分元素を同定した。測定箇所は見かけ上通常の組成と判断できること、鍮ができるだけ少ないこと、特殊な鍮がでていないこと、安全に測定できることなどを考慮して決定し、写真5で示される資料の側面部分とした。

4. 鉛同位体比の測定結果と考察

4-1 鉛同位体比測定値

測定された鉛同位体比を表1で示した。得られた値を今までに測定された他の試料と比較してみると、図1・2のようになった^{*) (2) (3) (7)}。

図1は縦軸が²⁰⁸Pb/²⁰⁶Pbの値、横軸が²⁰⁷Pb/²⁰⁶Pbの値である。この図をA式図と呼ぶこととする。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表わし、今回の結果をこのなかにプロットした。すなわち、日本の弥生時代に相当する時期の東アジア地域において、Aは中国前漢鏡が主として分布する領域で、華北の鉛である。Bは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛と推定される。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が集中する領域である。Dは朝鮮半島産の多鈕細文鏡と細形銅剣が分布する幅のあるラインの中心領域として示されることが判っている。図2は縦軸が²⁰⁸Pb/²⁰⁶Pbの値、横軸が²⁰⁷Pb/²⁰⁶Pbの値である。この図をB式図と呼ぶこととする。図2の中でA'、B'、C'、D'はそれぞれ中国の華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表わしている。これらの図の中に本測定値と今までに測定された火災斗資料の測定値を「●」で示した。今までに鉛同位体比を測定した火災斗は2種類で、長野県の川原田遺跡出土、および東京都落川遺跡出土の資料である。表1と図1、2の中にこれらの資料の値を参考のために示した。

4-2 鉛同位体比測定結果と考察

本資料及び今までに測定された火熨斗資料はA式図でC領域に含まれることが分かった。そこでB式図で調べてみると、やはりC'領域に含まれている。このことから、これら資料は日本産の材料と推定される。

もう一つ大切なことは今までに測定された火熨斗資料の値が表1、図2で示されるように、今回の測定値と完全に同じ値ではないが、かなり似通った値を示していることである。特に落川遺跡出土の資料とはA式図でもB式図でも良く似た値を示した。このことはこれら資料が完全に同一材料ではないにしても、関連した材料、即ち、似たような鉱山から採取された材料を利用している、あるいは似たような材料を混ぜた可能性があることを示唆している。

5. 蛍光X線分析法による化学組成

5-1 化学組成の測定結果

蛍光X線分析法で本火熨斗の化学組成を測定した。測定された蛍光X線スペクトルを図3と4で示す。図4は図3の縦軸を拡大した図で、小さなピークを見えるようにしてある。蛍光X線分析法では測定部表面から約100マイクロメートルまでの深さの化学組成に関する情報が得られる。それ故、表面に錆などがあれば影響を受けやすく、化学組成は必ずしも本体金属部分を反映しない場合がある。そこで定性的な結果を次にまとめた。これらの図から各元素のX線強度を表2のようにまとめた。

5-2 化学組成に関する考察

図3および表2からすると、銅を主成分とし、鉛とヒ素が副成分として含まれている。微量・少量元素としてアンチモン、スズ、銀、鉄が含まれている。ヒ素、鉛が多く、スズが少ないことは平安時代の日本産銅器によくある化学組成である。川原田遺跡、落川遺跡出土の火熨斗に関する蛍光X線測定値が報告されており、これらのスペクトルを図5、図6として再録した。なお、表3に両火熨斗のスペクトル線強度値を示した。ただし、川原田遺跡、落川遺跡の資料の測定は波長分散型の蛍光X線分析装置で行われており、今回の和手遺跡の資料はエネルギー分散型の機器で測定したので強度に関して直接の比較はしにくい。しかしながら機器の違いを考慮したとしてもこれら3つの資料は、良く似た化学組成を示している。即ち、銅が非常に多く含まれ、ヒ素と鉛が副成分である。そして微量のアンチモン、スズ、銀、鉄を含む。それぞれの元素に若干の濃度差はあるが、金属部分を測定しているのではないので、それほど大きな違いではない。

6. まとめ

和手遺跡から出土した火熨斗の自然化学的な測定から次のように推論される。即ち鉛同位体比の測定結果からは日本産の鉛が利用されていると推論される。また化学組成は銅が主成分でスズがほとんどなく、鉛とヒ素が多いという平安時代の銅材料によく見られる値を示した。それ故、日本産の材料を利用していると結論できる。長野県塩尻市の和手遺跡出土の本資料は、長野県川原田遺跡、東京都落川遺跡出土の火熨斗に鉛同位体比は同一ではないが、かなり似た値を示した。また化学組成も良く似ている。この点が和手遺跡出土の火熨斗と他の遺跡出土の火熨斗との関連性を考える上で、大きなポイントであ

ろう。

7. 引用文献

- (1) 平尾良光：古代日本の青銅器；M.A.C.サイエンス，4，22-33（1990），
Material Analysis Company
- (2) 平尾良光：古代日本の青銅器の原料産地を尋ねて；計測と制御 28，681-688（1989）
- (3) 平尾良光、馬淵久夫：表面電離型固体質量分析計 VG-Sectorの規格化について；保存科学 28，
17-24（1989）
- (4) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究；MUSEUM No.370，4-10（1982a）
- (5) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比から見た銅鐸の原料；考古学雑誌 68，42-62（1982b）
- (6) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究（二）；MUSEUM No.382，16-26（1983）
- (7) 馬淵久夫、平尾良光：東アジア鉛鉱石の鉛同位体比-青銅器との関連を中心に-；
考古学雑誌 73，199-210（1987）
- (8) 平尾良光、瀬川富美子；長野県御代田町川原田遺跡から出土した銅製火熨斗の科学的調査；
「川原田遺跡出土火熨斗の科学的調査」/長野県御代田町教育委員会編
9-13（1997）
- (9) 平尾良光、榎本淳子；Ⅱ火熨斗の科学的調査；「落川遺跡Ⅲ」/東京都日野市落川遺跡調査会編
121-131（1996）

表1 和手遺跡から出土した火熨斗の鉛同位体比

	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{206}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$
火熨斗 (和手遺跡：CP900 ^{*1)})	18.420	15.608	38.524	0.8473	2.0914
火熨斗 ^{*1)} (川原田遺跡：CP298 ^{*2)})	18.436	15.630	38.570	0.8478	2.0921
火熨斗 ^{*2)} (落川遺跡：SG84 ^{*3)})	18.436	15.610	38.535	0.8467	2.0902
誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0003

*1) 川原田遺跡出土火熨斗の科学的調査（1997）：長野県御代田町教育委員会（8）

*2) 落川遺跡Ⅲ（自然科学編）（1996）：東京都日野市教育委員会から引用（9）

*3) CP、SG番号は当研究室の鉛同位体比測定番号

表2 和手遺跡から出土した火熨斗の構成元素が示す蛍光X線の強度比^{*1)}

測定元素 X線エネルギー (keV) ^{*2)}	鉄 (6.4)	ニッケル (7.5)	銅 (8.0)	亜鉛 (10.0)	ヒ素 ^{*3)} (10.5)	鉛 (10.6)	銀 (22.1)	スズ (25.2)	アンチモン (26.3)	銅強度 (カウント/秒)
火熨斗 (和手遺跡; DX45 ^{*4)})	3.6	—	100	—	36	31	0.1	0.3	0.1	900

測定条件: フィリップス社製エネルギー分散型蛍光X線分析装置DX-95, ロジウム管球50kV・10 μ A, 100秒間測定, 測定面は下面で直径約20mm ϕ .

※1) 数値は8.0keVに表れる銅のX線強度を100としたときの各元素のX線強度比

※2) keVで表わされた値は各元素の励起X線のエネルギー

※3) ヒ素のピークは鉛の影響を補正した値

※4) DX番号は当研究室の蛍光X線測定番号

表3 御代田町川原田遺跡および日野市落川遺跡から出土した火熨斗の構成元素が示す蛍光X線の強度比^{*1)}

測定元素 回析角度 (2 θ) ^{*2)}	鉄 (57.5)	ニッケル (48.7)	銅 (45.0)	亜鉛 (41.8)	ヒ素 ^{*3)} (34.0)	鉛 ^{*3)} (28.3)	銀 (16.0)	スズ (14.0)	アンチモン (13.5)	銅強度 (カウント/秒)
川原田遺跡 火熨斗 (FL188) ^{*4)}	2.1	—	100	—	6.9	7.1	0.8	—	—	11000
落川遺跡 火熨斗 (XFL932) ^{*4)}	0.9	—	100	<0.4	6.4	1.3	0.4	0.1?	0.5	17000

測定条件: フィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置PW1404, スカンジウム管球50kV・60mA, 約30分間で10-60 $^{\circ}$ を走査, 測定面は下面で直径約10mm ϕ .

※1) 数値は角度45.0度における銅のX線強度を100としたときの各元素のX線強度比

※2) 2 θ で表わされた値は各元素の励起X線の角度位置

※3) 鉛のピークはスズの影響を、ヒ素のピークは鉛の影響を補正した値

※4) XFL・FL番号は当研究室の蛍光X線測定番号

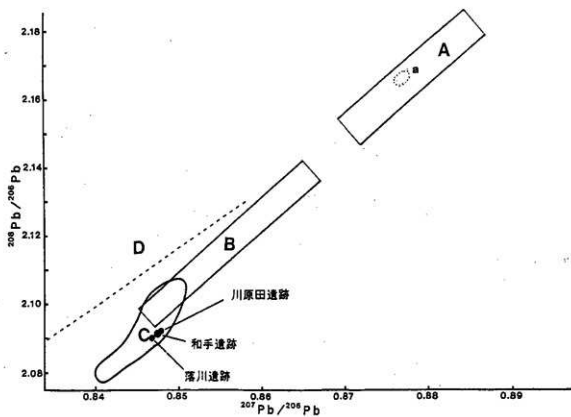


図1 火製斗が示す鉛同位体比 (A式図)

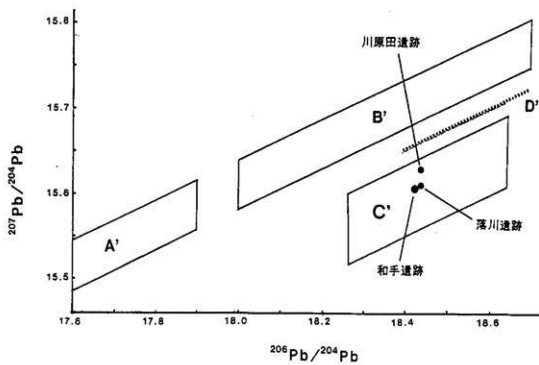


図2 火製斗が示す鉛同位体比 (B式図)

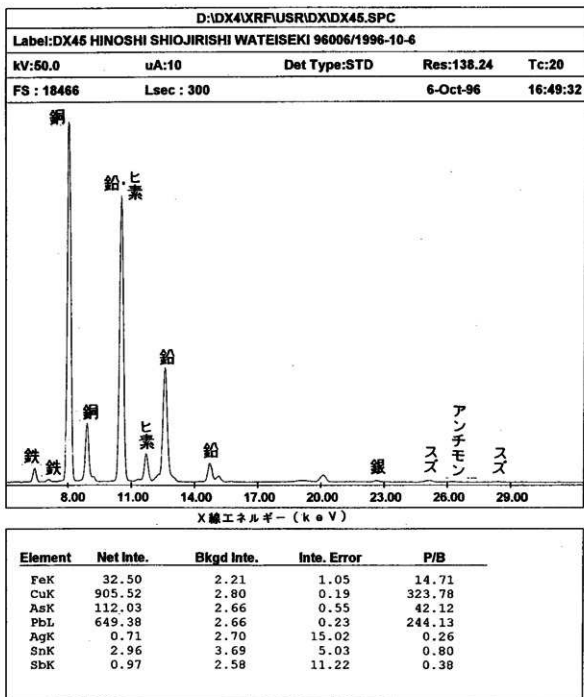


図3 和手遺跡から出土した火製斗の蛍光X線スペクトル図(全体図)

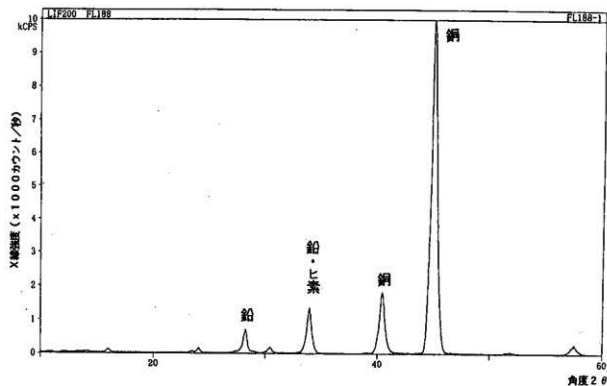


図5 a 長野県川原田遺跡から出土した火鋳斗の蛍光X線スペクトル図（全体図）

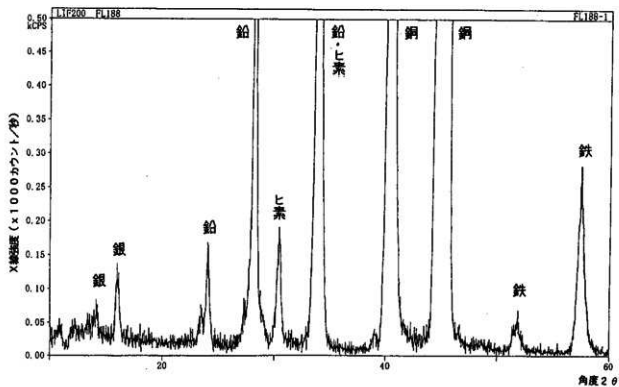


図6 b 長野県川原田遺跡から出土した火鋳斗の蛍光X線スペクトル図（拡大図）

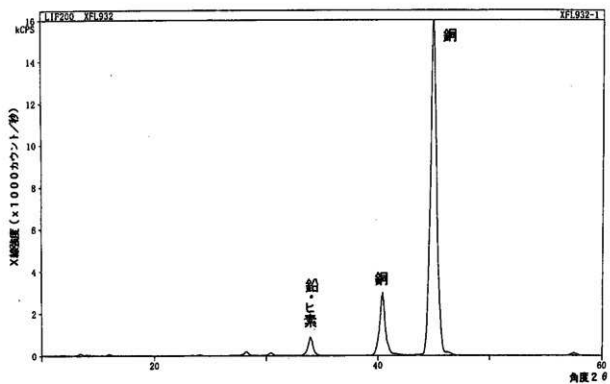


図 6 a 東京都落川遺跡から出土した火銃斗の蛍光X線スペクトル図（全体図）

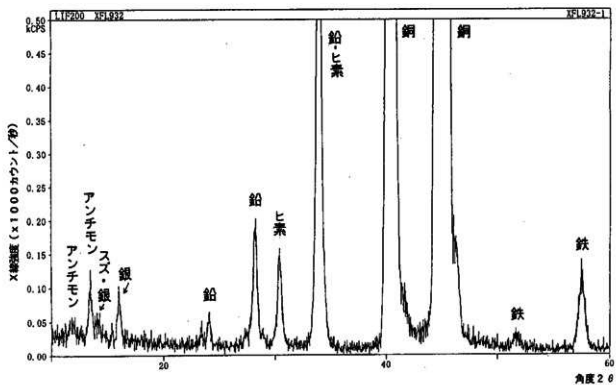


図 6 b 東京都落川遺跡から出土した火銃斗の蛍光X線スペクトル図（拡大図）

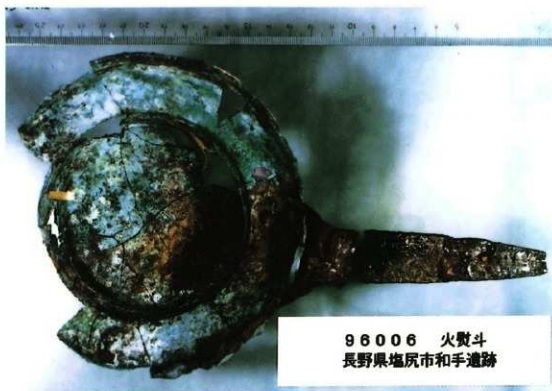


写真1 和手遺跡から出土した火熨斗



写真2 和手遺跡から出土した火熨斗の裏側



写真3 火熨斗の使用図 挿絵図部分(中国 12世紀初頭) ボストン美術館蔵



写真4 鉛同位体比測定用試料採取場所



写真5 蛍光X線測定場所

遺構・遺物一覧表

第1表 旧石器一覧表

No	図No	器種	出土地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備考
1	4-1	ナイフ形石器	H-3	黒曜石	4.4	2.7	0.5	2.3	完形	
2	2	"	"	"	4.0	1.3	0.5	1.8	"	
3	3	"	"	"	(4.0)	1.7	0.7	(1.8)	基部欠	
4	4	"	"	"	(3.0)	1.4	0.6	(1.7)	"	
5	5	"	"	"	(4.2)	2.2	0.8	(5.7)	先端欠	
6	6	"	E-4	"	4.1	1.8	0.6	3.1	完形	
7	7	"	"	"	5.5	1.5	1.7	7.1	"	
8	8	"	D-2	"	3.7	1.4	0.7	2.5	"	
9	9	"	"	"	(3.5)	1.7	0.7	(2.8)	基部欠	
10	10	"	"	"	(3.0)	1.3	0.5	(1.3)	"	
11	11	"	C-7	"	(2.5)	1.2	0.5	(1.0)	先端欠	
12	12	"	D-8	"	(2.1)	1.5	0.5	(1.3)	上半欠	
13	13	"	C-8	"	(2.1)	1.0	0.3	(0.3)	基部欠	
14	14	槍先形尖頭器	H-7	"	3.6	1.6	0.7	2.8	完形	
15	15	"	F-5	"	(3.1)	(1.9)	1.0	(4.8)	上半欠	
16	16	"	"	"	(2.0)	1.3	0.5	(1.1)	"	
17	17	"	"	"	(3.1)	1.7	0.9	(3.1)	"	
18	5-1	"	C-4	チャート	(6.6)	2.0	0.9	(9.6)	基部欠	
19	2	削器	F-7	"	6.0	2.7	0.5	9.7	完形	
20	3	掻器	"	黒曜石	(2.8)	2.6	0.5	(3.3)	上半欠	
21	4	"	F-5	チャート	(2.0)	(2.5)	1.1	(5.9)	一部のみ	
22	5	削器	H-7	黒曜石	(3.5)	2.4	1.1	(8.9)	下半欠	
23	6	掻器	"	"	3.7	2.8	1.5	14.9	完形	
24	7	"	"	"	2.9	1.4	0.7	1.9	"	
25	8	削器	"	"	(1.4)	2.8	0.9	(2.8)	先端のみ	尖頭器の素材か
26	9	"	溝1	"	(2.8)	3.3	1.4	(10.8)	下半欠	"
27	10	"	L-8	"	(2.8)	2.6	1.1	(6.0)	上半欠	"
28	11	"	"	"	3.4	2.4	1.2	7.5	完形	"
29	12	掻器	E-6	"	2.3	2.4	0.7	3.3	"	
30	13	"	L-8	チャート	(3.7)	5.3	1.6	(31.7)	上半欠	
31	14	"	E-3	黒曜石	2.5	3.2	0.8	5.2	完形	
32	6-1	"	"	チャート	4.1	4.0	1.4	22.0	"	
33	2	"	L-7	"	6.3	5.7	2.3	76.0	"	
34	3	"	"	"	5.5	3.2	1.4	17.9	"	
35	4	"	溝1	黒曜石	4.9	2.3	2.1	17.3	"	
36	5	加工痕のある剥片	H-7	"	3.4	2.2	0.9	3.0	"	
37	6	"	L-7	"	4.1	2.0	1.1	4.8	"	
38	7	"	C-5	"	(2.8)	(2.2)	0.6	(2.2)	先端欠	
39	8	"	溝1	チャート	3.9	3.7	1.3	(9.0)	完形	
40	9	"	C-5	黒曜石	2.7	2.5	0.8	3.5	"	
41	10	"	"	"	3.0	1.2	0.8	2.2	"	
42	11	"	F-3	"	2.7	1.7	0.7	1.4	"	
43	12	"	H-6	"	(2.5)	1.6	0.7	(2.8)	先端欠	
44	13	"	溝1	"	1.8	1.4	0.6	1.0	完形	
45	14	"	L-7	"	1.9	1.1	0.5	0.8	"	
46	15	"	"	"	2.1	2.4	0.4	1.7	"	
47	16	"	C-8	"	1.4	1.4	0.5	1.0	"	
48	7-1	"	"	"	2.7	3.5	1.1	6.5	"	
49	2	"	"	"	1.9	2.8	0.5	1.6	"	
50	3	"	C-5	"	(1.9)	1.5	0.7	(1.4)	先端欠	
51	4	"	E-9	"	(2.5)	1.9	0.7	(2.9)	先端欠	
52	5	"	D-2	"	3.9	1.2	0.7	5.2	完形	

No.	図No.	器種	出土地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備考
53	6	両極石器	F-5	黒曜石	2.5	1.1	0.8	2.0	完形	
54	7	"	G-5	"	2.4	1.5	0.8	2.4	"	
55	8	剥片	D-9	"	(3.7)	1.2	0.7	(1.5)	下端欠	
56	9	"	"	"	(1.9)	1.3	0.4	(0.6)	"	
57	10	"	"	"	6.2	2.0	1.2	9.1	完形	
58	11	"	C-5	"	5.3	1.8	0.7	4.6	"	
59	12	"	F-4	"	3.8	2.3	0.8	4.7	"	
60	13	"	L-2	"	(3.2)	1.9	0.8	(4.4)	下端欠	
61	14	"	"	"	(2.1)	1.9	0.4	(1.2)	"	
62	15	"	"	"	2.4	1.4	0.5	0.9	完形	
63	16	"	"	"	(4.6)	2.4	1.0	(7.5)	両端欠	
64	17	"	I-5	"	(3.0)	2.1	0.5	(2.3)	上端欠	
65	18	"	O-9	"	(2.4)	1.0	0.4	(0.7)	両端欠	
66	19	"	K-6	"	(2.8)	1.9	0.6	(2.1)	"	
67	8-1	"	D-9	"	(1.9)	1.2	0.3	(0.4)	"	
68	2	"	C-6	"	(1.7)	1.7	0.6	(1.5)	"	
69	3	"	"	"	(3.6)	2.0	0.8	(5.3)	上端欠	
70	4	"	F-7	"	3.4	1.4	0.8	1.5	完形	
71	5	"	L-8	"	3.8	2.0	0.5	2.9	"	
72	6	"	D-8	"	(3.1)	1.0	0.5	(1.0)	下端欠	
73	7	"	F-2	"	(2.2)	1.9	0.7	(2.3)	上端欠	
74	8	"	F-4	"	(3.9)	1.6	0.9	(4.2)	下端欠	
75	9	"	"	"	2.5	1.1	0.6	1.3	完形	
76	10	"	C-7	"	(4.3)	3.4	0.9	(8.9)	下端欠	
77	11	"	"	"	(2.5)	3.1	0.9	(5.2)	上端欠	
78	12	"	"	"	(3.1)	1.6	0.6	(2.5)	"	
79	13	"	溝3	チャート	(4.6)	3.3	0.9	(10.1)	下端欠	
80	14	"	F-6	"	4.2	2.6	1.3	13.2	完形	
81	15	"	C-4	"	5.0	2.0	1.2	10.3	"	
82	16	"	"	"	4.2	2.5	0.8	6.4	"	
83	17	"	L-8	黒曜石	(2.5)	2.2	0.6	(1.8)	下半欠	
84	9-1	"	F-7	"	5.7	3.4	1.8	25.5	完形	
85	2	"	L-8	"	6.0	3.0	2.5	24.2	"	
86	3	"	"	"	5.1	2.3	2.4	14.6	"	
87	4	"	B-2	チャート	4.9	2.7	0.8	7.3	"	
88	5	"	"	黒曜石	3.8	2.5	0.8	7.5	"	
89	6	"	I-7	凝灰岩	(4.9)	6.8	1.5	(66.8)	上端欠	
90	7	"	"	黒曜石	3.3	3.6	1.0	8.0	完形	
91	8	"	C-5	凝灰岩	(4.5)	4.5	1.6	(30.3)	下端欠	
92	9	"	D-3	チャート	3.6	3.7	1.1	13.0	完形	

第2表 縄文時代の石器一覧表

No.	図No.	器種	出土地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備考
1	10-1	打製石斧		砂岩	11.4	4.3	1.6	(111.0)	完形	
2	2	"	H-7	頁岩	(14.0)	(2.9)	(3.6)	(118.0)	左半欠	
3	3	磨製石斧	F-5	"	(10.4)	4.4	2.3	(172.0)	基部欠	
4	4	"	D-2	"	12.5	3.8	1.8	(114.0)	刃部欠	弥生時代か
5	5	凹石		中粒砂岩	(13.9)	9.0	6.0	(944.0)	半欠	凹+磨
6	6	殻石	M-4	"	12.2	7.7	3.8	484.0	完形	凹+敲
7	7	"	"	"	18.3	6.0	4.2	579.0	"	"
8	8	特殊磨石	"	"	16.9	6.8	6.0	1046.0	"	磨+敲
9	9	凹石	F-4	"	8.7	7.2	2.1	192.0	"	凹+敲
10	10	特殊磨石	"	"	(6.6)	5.6	5.1	(299.0)	半欠	磨+敲

第3表 遺構一覧表

住居No	グリッド	時期	平面形	規模	炉・カマド	備考
100	D-8・9	平安7・15期	方 形	6.2×6.5	カマド東壁中央	
101	E-8・9	平安7期			カマド "	
102	D-8	弥 生	長 楕 円 形	4.9×7.0		
103	E-8	平安8期	方 形	3.7×3.7	カマド西壁中央	
104	E-8・9	平安9期	方 形	4.1×4.4	カマド南壁中央	
105	E-8	平安9期	方 形	3.7×3.7	カマド東壁中央	
106	C-8・9	平安8期	(方形or長方形)	7.6×-		
107	C-8		(方 形)	4.0×-		
108	C・D-7・8	平安9期	長 方 形	3.8×4.5	カマド東壁中央	
109	D-7	平安7期	長 方 形	4.0×5.2	カマド西壁中央	
110	C・D-6・7	平安8期	方 形	3.2×3.3		
111						
112	F-8	平安7期	長 方 形	4.9×6.2	カマド東壁北寄り	
113	E・F-8	平安14期	方 形	3.2×3.5		
114	E・F-7・8	弥 生	方 形	5.1×4.9	地床炉中央	
115	F-7・8	平安7期	方 形	4.1×4.3	カマド東壁中央	
116	C-6	平安7期	長 方 形	3.4×3.2	カマド西壁中央	
117	D・E-5	平安14期	不 整 方 形	4.6×5.0	カマド北東隅	
118	E-6・7	平安8期	楕 円 形	4.4×5.2	カマド西壁中央	
119	F-7	平安8期	方 形	3.6×3.3		
120	F-7	平安10期	長 方 形	4.7×3.6	カマド東壁中央南寄り	
121	F-6・7	平安9期	方 形	3.6×3.5	カマド西壁中央	
122	D-4	平安9期	方 形	3.9×3.7	カマド "	
123	D-3	平安5期	方 形	(4.8)×(4.9)	カマド東壁中央	
124	D-3	平安7期	方 形	4.1×4.2	カマド "	
125	D・E-2・3	平安14期	長 方 形	5.7×6.9	カマド北東隅	
126	D-2	平安8期	長 方 形	4.3×3.8		
127	C・D-2・3	弥 生	不 整 円 形	6.2×5.5	石囲炉中央	
128	D-2	時期不明	隅 丸 方 形	3.56×3.92		
129	B・C-3	平安9期	方 形	4.0×3.6	カマド東壁中央	
130	C-3	平安9期	長 方 形	5.6×5.1	カマド東壁北寄り	
131	B-2・3	平安9期	方 形	5.1×4.6	カマド東壁中央	
132	C・D-5	弥 生	楕 円 形	6.2×7.1	石囲炉中央	
133	D-8	平安9期	方 形	4.1×4.2	カマド北東隅	
134	C-5	平安7期	方 形	4.4×4.5	カマド北壁中央	
135	C-5	平安10期	方 形	3.8×4.1		
136						
137						
138	C-5・6	時期不明	方 形	2.32×-		
139						
140	C-7	平安9期	不 明	不 明	カマド北壁西寄り	
141						
142	G-7	平安9期	(方 形)	(6.8×6.8)	カマド東壁中央	
143						
144						
145	G-7	平安15期	長 方 形	5.7×4.1	カマド北壁中央	
146	G-6	平安8期	方 形	3.8×3.5	カマド "	
147						
148	G-6・7	平安7期	(方 形)	(5.0×5.0)		
149	H-7	平安15期	長 方 形	5.0×5.9	カマド北東隅	
150	G・H-6・7	平安5期	方 形	3.6×3.6	カマド西壁中央	
151	G-5・6	弥 生	不 整 形	8.0×7.4	埋燬炉中央	

住戸No.	グリッド	時期	平面形	規模	炉・カマド	備考
152	H - 6	平安 9 期	方 形	3.1×3.3	カマド東壁中央	
153	H・I - 6	弥 生	方 形	4.4×4.6	炉中央	
154	I・J - 6	平安 8 期	方 形	4.9×4.9		
155	J - 5・6	奈 良	方 形	5.0×5.0	石組みカマド西壁中央	
156	J - 7・8	平安 5 期	(方 形)	- ×4.8	カマド北壁中央	
157	H - 6・7	平安 8 期	不 整 長 方 形	7.4×5.7	カマド東壁中央	
158	I・J - 7	平安 9 期	方 形	3.2×3.0	カマド北東隅	
159	J・K-5・6	平安 5 期	方 形	4.5×4.8	カマド東壁中央	
160	J - 7	平安 9 期	方 形	3.9×3.9	カマド西壁南寄り	
161	G - 5	平安 9 期	方 形	4.4×4.4	カマド東壁中央	
162	G・H-4・5	平安 10 期	方 形	4.4×4.1	カマド西壁中央	
163	F・G-4・5	弥 生	長 方 形	5.6×(6.0)		
164	F・G-4・5	弥 生	長 方 形	6.2×5.2	埋置炉中央	
165	G - 3・4	弥 生	台 形	5.6×6.0	“ 中央北寄り	
166	E・F - 4	時期不明	不 整 方 形	5.82×5.24		
167	E - 3	平安 8 期	長 方 形	5.2×4.6	カマド東壁中央	
168	E・F - 2	平安 10 期	方 形	4.2×4.1	カマド西壁中央	
169	F - 1・2	平安 9 期	方 形	3.3×3.3	カマド “	
170	F・G - 2	平安 9 期	方 形	4.9×4.3	カマド北壁中央	
171	G - 2	平安 10 期	方 形	4.2×4.0	カマド西壁中央	
172	G - 3	平安 8 期	方 形	3.4×3.2	カマド “	
173	G・H - 2	平安 8 期	方 形	3.6×3.2	カマド北壁中央	
174	E・F - 5	弥 生	不 整 形	4.6×4.8	炉東壁	
175	G・H - 4	平安 6 期	方 形	3.4×3.3	カマド東壁中央	
176	H - 3	平安 8 期	方 形	3.3×3.5	(カマド西壁中央)	
177	I - 2・3	平安 8 期	方 形	5.5×5.6	カマド南西コーナー	
178	I・J-2・3	弥 生	長 方 形	(4.6)×(5.2)		
179	J - 2	古 墳	方 形	8.1×8.2	カマド北壁中央	
180	K - 1・2	弥 生	隅 丸 方 形	- ×5.9		
181	G・H - 2	弥 生	不 整 形	7.4×7.0	石囲埋置炉	
182	I - 4	平安 14 期	隅 丸 方 形	5.6×5.1	カマド北東隅	
183	M - 1・2	弥 生	楕 円 形	5.6×6.4	(石囲炉)中央	
184	L・M - 5	平安 8 期	長 方 形	3.5×4.0	カマド西壁中央	
185	M・N - 8	平安 8 期	方 形	4.7×4.6	カマド東壁中央	
186	M - 8	平安 8 期	長 方 形	4.7×3.1	カマド “	
187	M - 7	平安 8 期	方 形	3.7×3.8	カマド東壁北寄り	
188	M - 7	平安 5 期	長 方 形	4.8×3.4		
189	J - 3	古 墳	方 形	3.5×3.1	カマド北壁中央	
190	L・M - 5	平安 9 期	方 形	3.3×3.2	カマド西壁中央	
191	M - 4・5	時期不明	(円形or楕円形)	径 7.5		
192	K - 6・7	平安 7 期	方 形	2.1×4.0	カマド東壁中央	
193	L - 6・7	弥 生	方 形	4.6×4.2	炉中央東寄り	
194	M・N - 4	時期不明	方 形	5.68×4.66		
195	M・N - 2	弥 生		6.4×4.9	石囲炉中央西寄り	
196	L - 5	平安 8 期	方 形	3.6×3.7		
197	J・K-6・7	平安 8 期	不 整 方 形	3.4×3.5	カマド東南コーナー	
198	H・I - 5	平安 8 期	方 形	3.6×3.8	カマド東壁中央	
199	H - 5	平安 9 期	方 形	3.2×3.5		
200	F・G - 5	平安 5 期	方 形	3.9×3.7	カマド東壁中央	
201	C - 3	平安 7 期	方 形	4.0×4.2	カマド北壁中央	
202	F - 6	弥 生	長 方 形	4.8×5.4	石囲炉中央	
203	E・F - 6	平安 8 期	方 形	3.9×4.0		
204						

住居No	グリット	時期	平面形	規模	扉・カマド	備考
205	J - 5	弥生	不整形	4.8×4.6	石囲炉中央北寄り	
206	L - 6	平安8期	方形	3.4×3.9	カマド西壁中央北寄り	
207	L - 6	平安8期			カマド東南隅	
208	K・L - 6	平安8期	長方形	2.9×3.5		
209	E - 7	平安8期	方形	2.6×2.8	カマド西壁中央	
210	E - 6	弥生	方形	4.7×5.5		
211						
212	M - 4	時期不明	方形	×3.98		

第4図 弥生時代石器一覧表

① 石鍬

No	図No	出土地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備考
1	40-1	溝1	頁岩	14.5	8.4	2.0	(281.0)	一部欠	刃部磨耗
2	2	"	"	(5.0)	(5.5)	1.1	(42.0)	基部のみ	
3	3	195住	"	(7.7)	6.8	1.1	(84.0)	上半欠	

② 打製石斧

No	図No	出土地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備考
1	40-4		頁岩	(7.2)	(5.5)	1.7	(109.0)	下半欠	
2	5	181住	砂岩	6.0	8.3	1.8	159.0	完形	
3	6		頁岩	(8.0)	5.0	1.2	(60.0)	基・刃部欠	

③ 磨製石包丁

No	図No	出土地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備考
1	43-4	163住	粘板岩	(3.8)	(3.5)	0.5	(10.1)	左半欠	

④ 打製石包丁

No	図No	出土地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備考
1	41-4	203住	砂岩	(4.3)	7.9	1.7	(59.0)	基部欠	
2	6	溝1	"	(6.6)	(11.4)	1.3	(144.0)	"	刃部光沢

⑤ 横刃形石器

No	図No	出土地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備考
1	40-7	127住	砂岩	9.4	11.5	2.0	289.0	完形	刃・基部磨耗
2	8	131住	頁岩	7.5	10.9	1.4	129.0	"	
3	41-3	172住	砂岩	5.7	6.5	1.0	38.0	"	
4	5	B-2	頁岩	(4.2)	5.7	1.2	(31.0)	"	
5	7	溝1	砂岩	7.6	14.2	2.0	262.0	"	刃部磨耗
6	42-3	158住	"	8.2	9.5	2.0	159.0	"	
7	8	165住	"	8.5	(10.0)	1.1	(109.0)	基部欠	刃部磨耗
8	43-1		"	10.2	(7.2)	2.0	(203.0)	左半欠	"
9	2		"	8.8	10.4	1.3	159.0	完形	"
10	3		"	(5.0)	9.0	2.4	(129.0)	基部欠	

⑥ 有肩扇状石器

No	図No	出土地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備考
1	40-10	142住	砂岩	9.7	8.9	1.2	131.0	完形	刃部光沢
2	41-9		"	7.4	(8.3)	1.8	(132.0)	"	"
3	42-2	163住	"	5.3	5.7	1.4	50.0	刃部のみ	"
4	4		"	7.6	(9.2)	1.0	(100.0)	一部欠	"
5	5	164住	"	10.3	(14.8)	2.6	(381.0)	刃部欠	"
6	6		"	9.4	15.1	1.8	250.0	完形	"

⑦ 有袂石器

No	図No	出土地点	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	41-1	166住	砂 岩	8.2	11.5	1.9	240.0	完 形	刃部光沢
2	2	"	"	9.4	14.5	2.4	390.0	"	"
3	8	"	"	11.8	(7.0)	4.0	(309.0)	左半欠	"
4	42-7	164住	"	10.3	13.8	1.5	(230.0)	刃部欠	"

⑧ 有柄石器

No	図No	出土地点	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	40-9	132住	砂 岩	7.0	(16.3)	1.2	(139.0)	一部欠	刃部光沢
2	42-1	157住	頁 岩	8.8	13.9	1.1	183.0	完 形	基部磨耗

⑨ 敲 石

No	図No	出土地点	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	43-9	164住	頁 岩	9.6	2.2	1.0	38.0	完 形	
2	11	132住	細粒砂岩	14.8	4.5	4.2	463.0	"	
3	44-1	"	"	8.3	9.0	5.4	618.0	"	

⑩ 砥 石

No	図No	出土地点	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	43-5	151住	中粒砂岩	9.6	2.5	2.0	92.0	完 形	
2	7	163住	"	(4.6)	2.5	2.6	(23.0)	一端欠	

⑪ 台 石

No	図No	出土地点	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	43-12	"	中粒砂岩	(14.9)	(13.3)	(5.1)	(1150.0)	欠 損	
2	13	127住	"	(9.3)	8.7	4.4	(471.0)	両端欠	

⑫ 打製石鏃

No	図No	出土地点	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	44-2	108住	黒曜石	(1.8)	(1.6)	0.7	(1.2)	基部欠	
2	3	123住	下呂石	3.2	(1.9)	0.6	(1.9)	片脚欠	
3	4	125住	黒曜石	1.7	1.7	0.2	(0.4)	"	
4	5	151住	"	(2.1)	(1.6)	0.4	(1.1)	下半欠	
5	6	"	下呂石	(1.7)	(2.0)	0.4	(1.3)	先端・片脚欠	
6	7	167住	黒曜石	2.0	1.1	0.4	0.6	完 形	
7	8	"	下呂石	2.1	1.7	0.4	1.1	片脚欠	
8	9	181住	黒曜石	2.7	2.0	0.4	1.0	基部欠	
9	10	"	下呂石	1.7	2.0	0.3	0.6	完 形	
10	11	182住	黒曜石	2.2	1.5	0.2	0.5	片脚欠	
11	12	183住	"	2.8	1.7	0.6	2.1	"	
12	13	"	下呂石	3.4	1.3	0.5	2.4	基部欠	
13	14	185住	黒曜石	2.3	1.8	0.7	1.8	片脚欠	
14	15	151住	下呂石	3.7	2.5	0.7	4.4	完 形	
15	16	G-7	黒曜石	2.6	1.5	0.5	2.0	片脚・基部欠	
16	17	"	"	1.9	1.5	0.2	0.8	完 形	
17	18	"	下呂石	3.9	1.7	0.7	2.8	"	
18	19	"	黒曜石	2.3	1.2	0.3	0.9	両脚・基部欠	
19	20	"	下呂石	2.0	1.4	0.3	0.5	片脚欠	
20	21	"	黒曜石	2.3	1.8	0.3	1.1	先端・基部欠	
21	22	"	下呂石	2.3	2.0	0.4	1.3	完 形	
22	23	"	黒曜石	2.3	1.6	0.3	1.0	片脚・基部欠	
23	24	113住	下呂石	3.9	3.2	1.0	8.7	完 形	
24	25	125住	黒曜石	3.0	2.4	0.9	6.2	"	

No	図No	出土地点	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
25	44-26	134住	下 呂 石	3.1	3.4	0.9	7.2	下半欠	
26	27	167住	黒 曜 石	2.9	2.0	0.5	2.3	"	
27	28	172住	下 呂 石	3.0	2.1	0.5	2.5	完 形	
28	29	132住	"	3.1	2.0	0.6	4.4	先端欠	
29	30		黒 曜 石	2.9	1.7	0.7	3.4	"	
30	45-1		チ ャ ー ト	3.9	2.6	0.7	8.4	"	
31	2		下 呂 石	2.8	2.0	0.4	2.4	先端・片脚欠	
32	3		"	3.0	2.2	0.6	3.5	完 形	

⑬ 尖頭器

No	図No	出土地点	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	45-4	153住	下 呂 石	4.8	2.3	1.3	15.7	完 形	

⑭ 剥 片

No	図No	出土地点	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	45-8	151住	チ ャ ー ト	4.7	3.5	0.9	11.8	完 形	RF#
2	9	183住	"	5.0	3.3	1.1	13.8	"	"
3	10	112住	下 呂 石	3.1	3.5	0.6	5.3	側縁折断	"
4	11	140住	"	3.6	2.9	0.6	6.2	"	"
5	12	151住	"	3.7	2.3	0.5	4.9	完 形	"
6	13	158住	"	3.1	2.6	0.5	3.2	"	"
7	14	183住	"	4.3	4.3	0.9	16.0	"	石 核
8	15	192住	"	3.0	4.2	0.4	5.3	側縁折断	"
9	46-1		"	3.7	2.9	1.6	16.2	完 形	石 核
10	2		"	2.9	5.2	1.0	13.8	"	"
11	3		"	2.4	3.9	0.6	5.2	"	U-F#
12	4		"	3.6	3.7	0.8	10.4	"	R-F#

⑮ 磨製石鏃

No	図No	出土地点	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	46-5	183住	粘 板 岩	4.6	2.5	0.3	3.5	完 形	
2	6	203住	"	5.2	1.9	0.3	2.6	基部欠	
3	7	202住	"	3.2	1.9	0.3	2.1	基部欠	
4	8	151住	"	2.5	2.1	0.3	2.5	両脚欠	
5	9	"	"	3.0	2.3	0.2	2.1	先端欠	
6	10	"	"	2.6	2.1	0.3	2.0	先端・片脚欠	

⑯ 磨製石鏃未製品

No	図No	出土地点	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	46-11	119住	粘 板 岩	3.6	1.8	0.2	1.6	完 形	
2	12	127住	"	5.8	3.7	0.3	9.4	"	
3	13	140住	"	4.4	2.1	0.3	2.4	"	
4	14	150住	"	4.9	3.0	0.2	4.3	"	
5	15	163住	"	2.8	1.8	0.2	2.0	両端欠	
6	16	164住	"	3.1	2.2	0.3	3.3	"	
7	17	165住	"	4.4	2.5	0.2	3.9	完 形	
8	18	182住	"	4.1	2.3	0.3	5.0	"	
9	19	189住	"	4.0	3.1	0.6	8.9	下端欠	
10	47-1	192住	"	4.1	2.3	0.3	2.9	完 形	
11	2	195住	"	3.7	2.2	0.2	2.4	"	
12	3	202住	"	6.1	2.7	0.2	6.2	"	
13	4	D-7	"	5.1	2.7	0.3	6.3	"	
14	5	"	"	2.5	3.2	0.3	3.3	両端欠	

No	図No	出土地点	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
15	47-6	I-7	粘 板 石	3.4	2.4	0.3	3.2	下端欠	
16	7	121住	"	6.9	2.9	0.4	11.1	完 形	
17	8	101住	"	5.0	2.5	0.4	4.9	一部欠	
18	9	129住	"	4.3	2.5	0.4	5.9	"	
19	10	148住	"	7.6	3.4	0.4	15.2	完 形	
20	11	151住	"	7.3	2.9	0.7	18.0	"	
21	12	153住	"	3.3	2.6	0.4	8.2	下端欠	
22	13	166住	"	3.5	2.2	0.4	3.6	上端欠	
23	14	172住	"	3.9	3.6	0.5		"	
24	15	178住	"	7.9	3.0	0.3	13.3	完 形	
25	16	151住	"	4.7	2.5	0.5	5.5	上端欠	
26	17	溝 1	"	4.1	2.9	0.4	3.5	一部欠	
27	18	101住	"	7.4	8.4	0.8	68.5	完 形	素材剥片

第5表 古代石器一覽表

① 砥 石

No	図No	出土地点	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	142-1	104住	凝 灰 岩	(5.8)	4.7	4.2	(162.0)	両端欠	
2	2	105住	"	(3.9)	4.6	1.2	(31.0)	一端欠	
3	3	"	"	(6.9)	3.9	2.8	111.0	両端欠	
4	4	106住	中粒砂岩	8.1	2.9	1.6	61.0	完 形	
5	5	112住	凝 灰 岩	(7.1)	3.7	2.8	81.0	一端欠	
6	6	121住	中粒砂岩	(9.8)	7.3	2.7	334.0	"	
7	7	"	"	(10.9)	4.6	4.3	291.0	"	
8	8	149住	"	(4.8)	2.1	1.3	19.5	"	
9	9	150住	凝 灰 岩	7.5	2.9	1.4	50.0	完 形	
10	10	"	"	(6.3)	4.0	2.4	109.0	一端欠	
11	11	164住	中粒砂岩	11.5	5.0	2.1	199.0	完 形	
12	12	"	"	5.6	3.6	1.4	58.0	"	
13	13	169住	"	11.1	3.3	2.5	165.0	"	
14	14	171住	細粒砂岩	11.4	4.6	3.5	391.0	"	
15	15	173住	凝 灰 岩	(14.6)	5.7	3.2	407.0	一端欠	
16	16	179住	"	5.7	3.6	1.1	29.0	"	
17	17	"	中粒砂岩	7.1	2.7	1.8	59.0	完 形	
18	18	182住	頁 岩	(10.4)	3.7	2.4	122.0	一端欠	
19	19	"	凝 灰 岩	8.5	3.6	1.3	69.0	"	
20	143-1	184住	安 山 岩	8.5	5.5	4.5	451.0	"	
21	2	185住	中粒砂岩	9.7	2.4	1.9	86.0	完 形	
22	3	"	"	(11.8)	22.5	4.0	1489.0	半分欠	
23	4	"	"	(16.9)	10.1	4.6	1211.0	一端欠	
24	5	187住	"	(11.3)	9.5	4.2	966.0	"	
25	6	溝 1	"	(10.0)	7.4	4.3	378.0	"	
26	7	溝 2	"	(3.5)	2.6	1.6	30.0	"	

② 紡錘車

No	図No	出土地点	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	143-8	163住	-	6.0	6.0	0.8	(15.5)	欠 損	粘土製
2	9	117住	凝 灰 岩	5.1	5.0	2.3	57.0	完 形	
3	10	181住	粘 板 岩	4.8	4.7	1.1	28.3	"	
4	11	177住	-	(3.8)	(3.7)	0.4	(7.3)	欠 損	粘土製
5	12	"	-	1.6	1.9	1.8	5.0	完 形	"
6	144-1	179住	滑 石	3.5	3.4	1.7	29.7	"	
7	2	167住	粘 板 岩	5.4	5.4	0.4	(4.2)	欠 損	

③ 鑄物用石錘

No	図No	出土地点	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	144-3	112住	中粒砂岩	12.2	3.9	2.4	119.0	完 形	
2	4	"	"	9.4	3.7	2.8	119.0	"	
3	5	"	安山岩	7.7	4.7	2.5	168.0	"	
4	6	"	凝灰岩	10.5	4.3	2.2	178.0	"	
5	7	"	中粒砂岩	11.2	3.8	2.9	182.0	"	
6	8	"	"	9.1	3.7	3.2	185.0	"	
7	9	"	"	10.0	4.3	3.4	200.0	"	
8	10	"	"	11.2	4.2	3.5	201.0	"	
9	11	"	安山岩	11.3	4.2	3.1	221.0	"	
10	12	"	中粒砂岩	12.0	6.6	3.4	235.0	"	
11	13	"	安山岩	9.8	3.8	4.1	250.0	"	
12	14	"	硬砂岩	11.8	4.2	3.0	257.0	"	
13	15	"	安山岩	11.3	4.7	3.7	270.0	"	
14	16	"	硬砂岩	14.9	3.5	3.5	270.0	"	
15	17	"	安山岩	10.8	4.9	3.3	280.0	"	
16	18	"	頁 岩	11.5	4.0	1.8	93.0	"	
17	19	"	安山岩	9.7	3.6	2.6	83.0	"	
18	20	198住	中粒砂岩	8.5	2.8	2.3	59.0	"	
19	21	"	硬砂岩	10.0	2.4	2.7	61.0	"	
20	22	"	頁 岩	7.8	2.7	2.1	69.0	"	
21	145-1	"	"	7.6	3.4	1.5	75.0	"	
22	2	"	細粒砂岩	7.6	3.2	2.4	79.0	"	
23	3	"	中粒砂岩	9.7	3.2	1.7	80.0	"	
24	4	"	安山岩	8.3	2.8	2.3	90.0	"	
25	5	"	頁 岩	8.2	3.2	1.1	46.0	"	
26	6	"	"	7.4	3.1	1.5	56.0	"	

④ 石 鐮

No	図No	出土地点	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	145-7	150住		2.3	4.0	0.7	(7.3)	一部欠	
2	8	185住		2.7	3.7	0.6	(11.8)	"	

第6表 古代鉄製品一覧表

① 鎌

No	図No	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	145-9	101住	(4.6)	(1.5)	0.2	(4.0)	刃部のみ	
2	10	149住	14.3	3.7	0.2	48.5	完 形	
3	11	"	(6.0)	(2.7)	0.2	(8.5)	刃部のみ	
4	12	G-6	(6.0)	(2.7)	0.3	(12.5)	"	
5	13	154住	(9.5)	(3.0)	0.2	(21.5)	体部のみ	

② 刀 子

No	図No	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	151-14	106住	(5.2)	0.9	0.3	(3.0)	基部欠	
2	15	108住	(8.0)	1.1	0.3	(8.5)	刃・基部欠	
3	16	101住	(5.3)	1.2	0.3	(8.0)	"	
4	17	118住	21.7	2.4	0.5	52.0	完 形	
5	18	140住	(5.6)	1.0	0.4	(5.5)	基部欠	
6	19	"	(19.7)	1.5	0.5	(26.0)	刃・基部欠	
7	146-1	"	(11.0)	1.5	0.6	(20.5)	"	
8	2	149住	(9.3)	1.2	0.3	(10.5)	刃部欠	
9	3	"	(5.3)	1.3	0.4	(7.0)	刃・基部欠	

No	図No	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
10	146-4	149住	(5.1)	0.8	0.3	(3.0)	基部欠	
11	5	"	(5.3)	1.0	0.4	(8.0)	刃・基部欠	
12	6	154住	(4.2)	1.0	0.3	(2.5)	"	
13	7	172住	(6.2)	1.7	0.3	(9.5)	"	
14	8	174住	(6.6)	0.9	0.3	(5.0)	刃部欠	
15	9	185住	(6.0)	1.0	0.4	(6.0)	"	
16	10	"	(4.9)	1.1	0.3	(5.0)	刃・基部欠	
17	11	"	(5.0)	0.6	0.4	(4.0)	刃部欠	
18	12	㊸	(12.0)	3.9	0.7	(69.5)	刃・基部欠	

③ 紡錘車

No	図No	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	146-16	130住	4.4	(4.1)	0.1	(6.5)	一部欠	紡輪
2	17	"	(4.7)	(3.2)	0.3	(11.5)	"	"
3	18	140住	7.5	5.8	0.6	(45.0)	上下軸欠	紡輪・軸
4	19	149住	4.8	4.8	0.3	21.5	完 形	紡輪
5	20	150住	4.8	5.1	0.4	20.0	"	"
6	21	"	6.9	0.5	0.5	(4.5)	両端欠	軸
7	22	161住	8.3	0.5	0.5	(8.0)	"	"
8	147-1	"	25.8	5.3	0.6	51.0	完 形	紡輪・軸

④ 穿引金具

No	図No	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	146-23	133住	4.0	10.2	0.3	(26.5)	片脚欠	

⑤ 織

No	図No	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	147-2	104住	(7.5)	0.8	0.4	(4.0)	基部欠	
2	3	116住	(7.2)	(3.7)	0.6	(16.5)	逆刺・基部欠	
3	4	117住	(16.3)	1.7	0.9	(21.0)	基部欠	
4	5	125住	(14.3)	(4.6)	1.2	(23.5)	刃・基部欠	
5	6	"	(12.0)	1.4	0.7	(21.0)	"	
6	7	150住	(10.4)	0.9	0.5	(8.0)	"	
7	8	140住	(6.7)	1.5	1.0	(11.5)	"	
8	9	169住	6.7	2.8	0.3	13.0	完 形	

⑥ 釘

No	図No	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	147-10	G-7	(6.3)	0.7	0.5	(5.0)	頭部欠	
2	11	121住	(3.1)	1.0	1.0	(3.5)	脚部欠	
3	12	124住	(9.4)	1.0	1.3	(17.5)	"	
4	13	131住	(6.6)	(3.0)	(3.0)	(28.0)	"	
5	14	140住	(9.8)	1.2	1.0	(25.0)	"	
6	15	"	(6.5)	1.2	0.9	(12.5)	"	
7	16	117住	(8.5)	1.1	1.1	(18.5)	"	
8	17	140住	(4.6)	1.4	1.3	(15.5)	"	
9	18	169住	(5.0)	0.6	0.6	(3.5)	"	?
10	148-1	180住	(7.4)	1.1	0.6	(9.5)	"	
11	2	185住	(5.1)	1.1	0.9	(7.0)	"	
12	3	116住	(8.4)	1.0	1.0	(8.0)	"	?

⑦ 鉄錘

No	図No	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	148-21	116住	6.4	1.7	1.5	(8.5)	上端欠	

⑧ 器種不明

No	図No	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	破損状況	備 考
1	148-4	112住	(6.0)	1.0	0.6	(20.0)	両端欠	
2	5	161住	(6.2)	0.6	0.4	(4.5)	"	
3	6	181住	(9.8)	0.6	0.4	(10.0)	一端欠	
4	7	185住	(7.6)	0.7	0.4	(4.5)	"	?
5	8	191住	(4.3)	1.0	0.8	(10.5)	両端欠	
6	9	125住	7.3	3.2	0.7	47.5	完 形	
7	10	150住	(8.4)	1.6	0.6	(23.5)	先端欠	
8	11	G-7	(11.0)	0.8	0.6	(18.5)	一端欠	?
9	12	100住	(14.0)	0.6	0.4	(18.0)	両端欠	?
10	13		(15.0)	0.7	0.5	(16.0)	"	
11	14	106住	2.5	2.5	1.5	4.5	完 形	
12	15	"	2.5	2.5	1.0	(2.0)	半 欠	
13	16	172住	2.5	2.5	1.0	(1.5)	"	
14	17	158住	1.2	3.9	1.7	11.0	完 形	
15	18	185住	3.1	3.1	0.4	8.5	"	
16	19	140住	(8.0)	1.8	0.8	(19.5)	胴部欠	
17	20	106住	(5.6)	1.3	0.6	(9.0)	一端欠	

報告書抄録

ふりがな	わでいせき							
書名	和手遺跡							
副書名	カインズホーム建設に伴う緊急発掘調査報告書Ⅱ							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	神村 透、桐原 健、直井雅尚、平尾良光、榎本淳子、早川泰弘、小松 学							
編集機関	塩尻市教育委員会							
所在地	〒399-07 長野県塩尻市大門七番町3番3号 TEL 0263-52-0280							
発行年月日	1997年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
和手遺跡	長野県塩尻市 大字広丘高出	市町村	遺跡番号	°	°			
		20215	123	36° 7' 7"	137° 57' 50"	19951212~ 19960329	7,000	大型店建設に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
和手遺跡	集落址	旧石器時代				ナイフ形石器、 尖頭器、石刃、 石核		松本平最大級の 旧石器時代の遺 跡である。
		弥生時代		竪穴住居 19軒		弥生土器、有肩 扇状石器、紡錘 車、磨製石鏃		伊那谷地域の影 響を強く受けて いる。
		古墳時代末~ 平安時代		竪穴住居 87軒 掘立柱建物2棟 溝 4条		土師器、須恵器、 灰釉陶器、緑釉 陶器、青磁、白 磁、火甕斗、鉄 器、墨書土器		平安時代の拠点 的集落である。

和手遺跡

—カインズホーム建設に伴う緊急発掘調査報告書Ⅱ—

平成9年3月20日 印刷

平成9年3月25日 発行

発行：塩尻市教育委員会

印刷：柳クマガイ印刷

